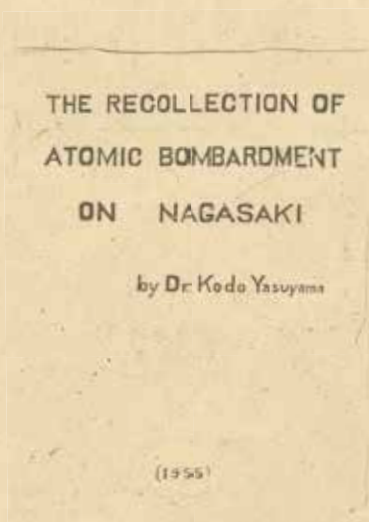
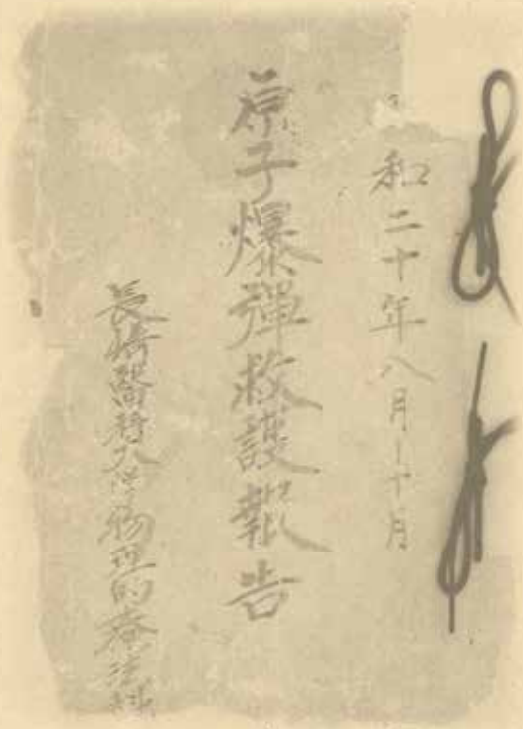


長崎医科大学・附属医院

# 原爆被災資料目録

長崎大学附属図書館医学分館所蔵  
(原爆後障害医療研究所 旧所蔵分)



令和3年1月

原爆復興75周年記念事業実行委員会

長崎医科大学・附属医院

# 原爆被災資料目録

長崎大学附属図書館医学分館所蔵  
(原爆後障害医療研究所 旧所蔵分)

令和3年1月

原爆復興75周年記念事業実行委員会



# ごあいさつ



前村 浩二



宮崎 泰司

原爆復興75周年記念事業会実行委員会 共同代表

長崎大学医学部長

前 村 浩 二

長崎大学原爆後障害医療研究所長

宮 崎 泰 司

原子爆弾投下から今年で75周年を迎えました。医学部長及び原爆後障害医療研究所長が共同代表を務めさせていただき、記念事業を計画し、このたび無事に終えることができました。ご支援いただいた方々に深謝申し上げます。今後長崎医科大学の被爆の歴史とさらには長崎、広島の被爆経験をどのように世に継承していくかを考え続けていかななくてはなりません。

原爆後障害医療研究所ではこれまで貴重な原爆関連資料を収集、保管してきました。永井隆博士の「原子爆弾救護報告」や調来助教授の「原爆被災復興日誌」および「原子爆弾災害調査・調査票」の原本を始め、医学者の立場から原爆被害の実相を伝えることができる貴重な資料です。これらの資料は永久保管され常に人々の目に触れる所に置かれるべきものです。

被爆から75年の節目において「継承」というテーマで何をすべきかを考えたとき、当研究所でも世代交代が進むにつれ当該資料の存在やその重要さを継承することが難しくなることが危惧されることも現実として考えられました。このためには長崎大学として対応しておくことが肝要と考え、これを契機に当該資料を長崎大学附属図書館に移管し、さらに広く資料の存在を知っていただくために、資料目録を作成し公開することといたしました。併せて、従来から医科大学関係の遺族の皆様からの要望が多い「忘れな草」と医科大学の被害の記録である「追憶」の増刷を企画いたしました。

折しも、新型コロナウイルス感染症が流行することとなり、密集、密接等を避けるため、8月9日の医学部原爆犠牲者慰霊祭は規模を大幅に縮小して実施されました。同様にこれまで節目の年に地域の方々を含む多くの方にご来訪いただいていた資料・写真展示の開催は本事業では中止とし、また、記念講演会はオンライン授業での実施とするなど、事業の縮小、変更をせざるを得ない事態となってしまいました。ご期待いただいていた方々には大変申し訳ないこととなってしまいました。それに代わるものを今後ご提供できますよう努力してまいりますので、今後とも引き続きのご助言・ご支援をお願いいたします。

令和3年1月

# 目次

## 原爆被災資料目録

P7～48

分類名	分類記番号	資料名	
学術調査・貴重資料	A	.....	9
	A01	原子爆弾救護報告	
	A02	原爆被災復興日誌	
	A03	マンハッタン管区調査団報告書（マイクロフィルム）	
	A04	原子爆弾災害調査・原簿	
	A05	原子爆弾災害調査票	
	A06	浦上三山救護班作業報告書	
	A07	大村海軍病院に於ける長崎医大日記	
	A08	「長崎原爆の記録」原稿	
	A09	「長崎原爆の記録」の英語版原稿写し	
	A10	調 来助教授のABCC手記	
	A11	救護班編成会議議事録	
	A12	長崎医科大学被爆者会議録（英語, 昭25）	
事務文書関連	B		
(1) 戦災処理	Ba	.....	15
	Ba01	昭和20年8月9日の原子爆弾に依る被害状況	
	Ba02	日本育英奨学生戦災死亡者に関する綴	
	Ba03	遺骨引渡一覧表	
	Ba04	原子爆弾統計表	
	Ba05	原爆当時の死亡者及び生存者名簿	
	Ba06	原子爆弾当時人員一覧表および戦災者名簿	
	Ba07	原爆犠牲者名簿（職員・看護婦）	
	Ba08	長崎医科大学・職員連絡簿	
	Ba09	大学・職員連絡簿	
	Ba10	戦災死亡者連絡先調査	
	Ba11	遺族手当名簿	
	Ba12	功績調査の件	
	Ba13	防空に従事して死傷した医療従事者等に対する特別支出金関係綴	
	Ba14	防空医療業務従事者関係書類	
	Ba15	死傷医療従事者に対する特別支出金支給事務処理要領ほか	
	Ba16	戦災処理関係綴（昭31）	
	Ba17	弔意金請求に関する調査依頼文書（昭31）	
	Ba18	弔意金請求手続きに関する変更通知文書（昭31）	
	Ba19	弔慰金請求に関する中間報告（昭31）	
	Ba20	庶務係長報告文書	
	Ba21	附属医院・汽缶場職員の死亡退職金調査に関する文書（昭47）	
	Ba22	旧長崎大学附属病院における雇用人の処遇について（昭55）	
	Ba23	戦傷病者戦没者遺族等援護法改正の公布（昭44）	
(2) 慰霊祭関連	Bb	.....	26
	Bb01	長崎医科大学原爆死亡者遺族名簿（昭30）	
	Bb02	原爆記念日行事について原議文書（昭47）	
	Bb03	昭和47年度原爆犠牲職員学生慰霊祭	
	Bb04	原爆犠牲職員学生名簿（昭55）	

(3) 原爆以前	Bc	.....	28
	Bc01	長崎医科大学報国団役員名表	
	Bc02	防空当直規約	
(4) その他	Bd	.....	29
	Bd01	文部大臣弔辞	
	Bd02	マッカーサ元帥への嘆願書	
	Bd03	長崎医科大学沿革略（昭和17年まで）	
	Bd04	長崎医大の被害状況（英文）	
	Bd05	原爆調査委託費（昭29）	
私信・手紙	C	.....	32
	C01	西森一正氏が父親に宛てた私信	
	C02	西森一正氏の「原子爆弾救護報告」の説明私信	
	C03	泰山弘道氏に宛てたホーン医師からの私信（8通）	
	C04	永井 隆の葉書	
	C05	永井 隆の書「平和を」の絵葉書	
寄贈・遺品	D	.....	34
	D01	西村トシコ氏の回想画	
	D02	角尾 晋学長の写真	
	D03	内藤勝利教授の名刺	
	D04	内藤勝利教授の旅客運賃割引證	
	D05	原爆見舞い葉書	
	D06	内藤勝利教授の写真	
	D07	日本婦人科学会長弔辞	
	D08	日本産業衛生協会総会懇談会通知	
	D09	教授会開催通知	
	D10	内藤勝利教授の履歴書	
	D11	内藤勝利教授の業績	
	D12	内藤勝利教授の遺品寄贈記事等	
	D13	文部大臣弔辞	
	D14	小寺健次郎氏の出征寄書と腕章	
	D15	服巻勝之氏の遺品	
	D16	鬼塚正之氏の手記	
	D17	亀本近六氏の遺品	
	D18	野上義雄氏の遺品	
	D19	田中和子氏の遺品	
	D20	青木義勇教授の遺品	
	D21	原子爆弾救護報告の複製品	
	D22	復元地図	
雑誌・新聞記事	E	.....	45
	E01	朝日ジャーナル（1959年）	
	E02	週刊朝日 臨時増刊（1970年）	
	E03	TIME誌表紙（1995年）	
	E04	TIME誌へのメッセージ掲載（1995年）	
	E05	ルモンド紙意見広告（1996年）	
	E06	朝日新聞論壇（1996年）	

令和2年度医学部原爆犠牲者慰霊祭と過去の講話記録

P49～68

文部科学省大臣弔辞	文部科学大臣 萩生田 光一	51
医学部長式辞	医学部長 前村 浩二	52
講話	長崎大学名誉教授 相川 忠臣	53
過去の講話記録		
鈴木達治郎	長崎大学核兵器廃絶研究センター センター長	平成28年度 58
宮崎 泰司	長崎大学原爆後障害医療研究所 所長	平成29年度 61
宮崎 泰司	長崎大学原爆後障害医療研究所 所長	平成30年度 64
三根真理子	長崎原子爆弾被爆者対策協議会 理事長	令和元年度 66

原爆復興75周年記念事業について

P69～73

編集後記	74
------	----

---

# 原爆被災資料目録

---

---

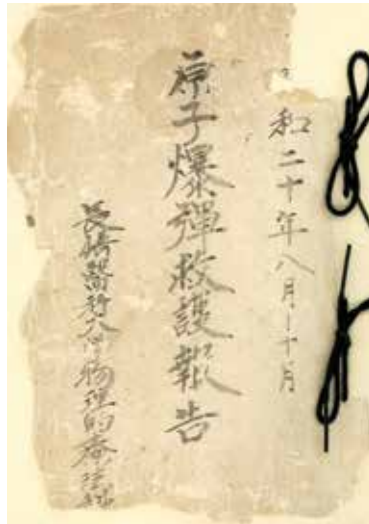




## A 学術調査・貴重資料

### A01 原子爆弾救護報告

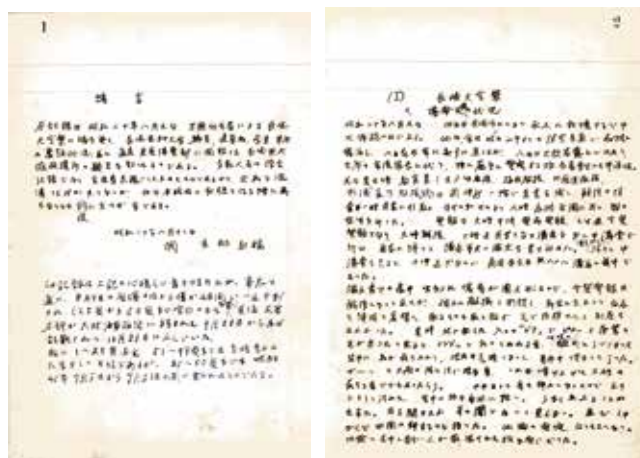
長崎医大第11医療隊 隊長 永井隆が学長に提出した報告書。8月12日から2か月間、三山で診療した患者125名の詳細な記録と放射線による病変の特徴や原爆の将来などについてまとめられている。原爆から25年後に民家から発見された。昭和45年9月、朝日新聞社から「長崎医大原子爆弾救護報告」として出版された。劣化、損傷が著しいため2005年、東京修復保存センターに依頼し修復作業を行った。



<https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/nagai/index.html>

### A02 原爆被災復興日誌

第6医療隊隊長 調 来助が昭和20年8月13日から書き始めた日誌。原爆被災の状況とともに医大復興に奔走したことが詳細に記録されている。



医大再建の項

[https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/materials-data/futtko\\_diary.html](https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/materials-data/futtko_diary.html)

(参考) 私の原爆体験と原爆障害の概要

<https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/shirabe/>

### A03 マンハッタン管区調査団報告書（マイクロフィルム）

1946年4月、バーネット大佐からウォーレン大佐に提出された「広島と長崎におけるマンハッタン管区原子爆弾調査団」の最終報告書。被爆50周年（1995年）に長崎放送の関口達夫氏がアメリカの国立公文書館から入手したもの。

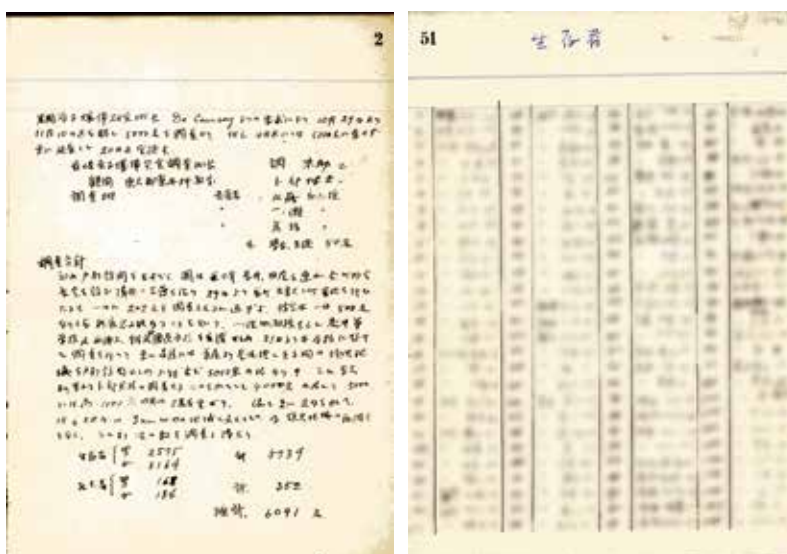


翻訳併記

<https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/manhattan/>

### A04 原子爆弾災害調査・原簿

調 来助博士の原子爆弾災害調査の方針および対象者一覧。調査対象者の調査番号、姓名、性別、年齢、地域別の被爆者の症状と診断および遮蔽状況などが記録されている。



## A05 原子爆弾災害調査票

調 来助博士を中心とする教官と医学生により、被爆直後の1945年10月から12月までの3か月間に原爆の人体への影響が調査された。5778人の被災者に対して60項目にわたる聞き取り、被爆場所や症状などについて記録された。全26冊。この調査をもとに「長崎に於ける原子爆弾傷害の統計的観察」としてまとめられた。



(参考:調査報告書) 長崎に於ける原子爆弾傷害の統計的観察

[https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/materials-data/shirabe\\_report.html](https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/materials-data/shirabe_report.html)

## A06 浦上三山救護班作業報告書

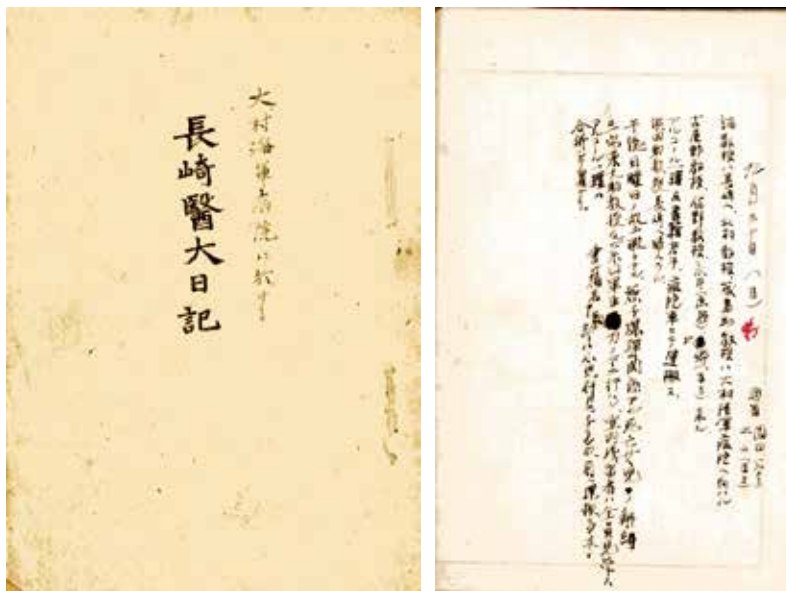
長崎医大第11医療隊隊長 永井 隆から長崎県防衛本部長、長崎市長及び西浦上出張所長にあてたもの。8月12日から22日の11日間の川平町と三山町での巡回診療に関する報告である。



[https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/materials-data/kyugohan\\_report.html](https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/materials-data/kyugohan_report.html)

## A07 大村海軍病院に於ける長崎医大日記

昭和20年9月24日から12月2日の間の大村海軍病院における長崎医大の医師や学生の日々の行動を週番が記録したものを。



## A08 「長崎原爆の記録」原稿

大村海軍病院、院長 泰山弘道による原稿用紙427枚の原稿。1951年8月9日脱稿。大村海軍病院での重症患者の写真と内容が記録されている。758名の原爆患者が収容され、惨状を目撃した著者が実相を克明に記録、アメリカの原子研究班、長崎医科大学の復興などについて記録されている。「長崎が最後の被爆地であるように」との願いが込められている。





# A09 「長崎原爆の記録」の英語版原稿写し

泰山弘道の著書「長崎原爆の記録」の英語版原稿の写しである。タイトルは“THE RECOLLECTION OF ATOMIC BOMBARDMENT ON NAGASAKI”、1955（年）と記されている。



# A10 調来助教授のABCC手記

ABCC歴史編纂のためABCCに関する資料の提出を依頼された際に記された日記等の資料である。調来助教授のABCC関係者との交流が記されている。



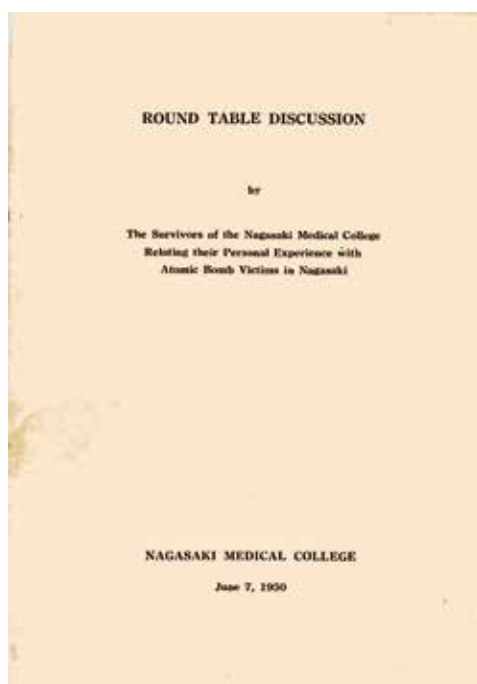
## A11 救護班編成会議議事録

昭和24年7月12日に新興善医院に於いて行われた長崎大学医学部救護班編成に関する会議の議事録である。

長崎大学医学部救護班編成に関する件	
昭和24年7月12日午後2時	長崎新興善医院10号会議室
〔人員編成〕	
長崎大学医学部救護本部 (長崎班) 平張九休隊長	
長崎班部長	辻村教授
幹部	柴田助教授 川本重利手
	朝永助教授 山本康哲係長
	渡内助教授 村山修長
	辻 藩師
別表第一	小田清中
右支隊	第一班 内外科(2) 産婦内科(2) 皮膚科(2) 小児科(1) 薬局(2) 看護婦(2) 事務(1)
	第二班 外科(2) 婦人科(2) 泌尿内科(1) 眼科(1) 小児科(1) 薬局(2) 看護婦(1)
	① 班長は選出 幹部中より任命すること。

## A12 長崎医科大学被爆者会議録 (英語, 昭和25)

1950年6月7日、長崎医科大学の被爆生存者の体験を語りあう会議が開催された。参加者は調 来助教授をはじめ13名の被爆体験者、3名の教職員のほかABCCからのゲスト4名が含まれていた。

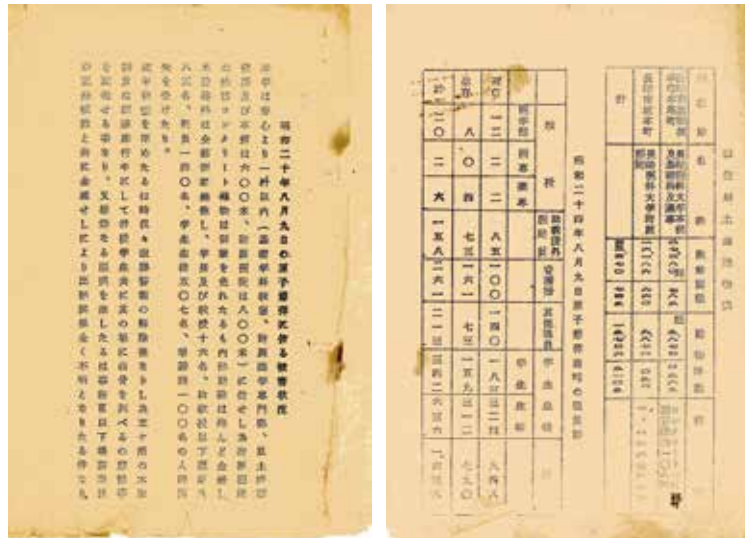


## B 事務文書関連

### (1) Ba 戦災処理

#### Ba01 昭和20年8月9日の原子爆弾に依る被害状況

長崎医大の当時の敷地面積、生存数と死亡数が教授、医局員、看護婦、職員及び学生の別に記載されている。

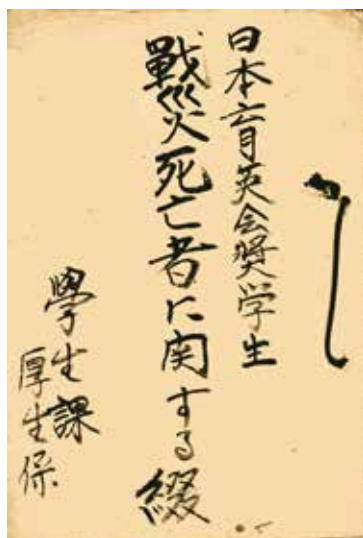


種別	人数
教授	12
医局員	22
看護婦	22
職員	22
学生	1,500
合計	1,600

<https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/materials-data/higai-jyokyou.html>

#### Ba02 日本育英奨学生戦災死亡者に関する綴

学生課厚生係で作成された戦災死亡者の奨学金返済免除関連の文書である。



日本育英会奨学生  
戦災死亡者に関する綴

学生課  
厚生係



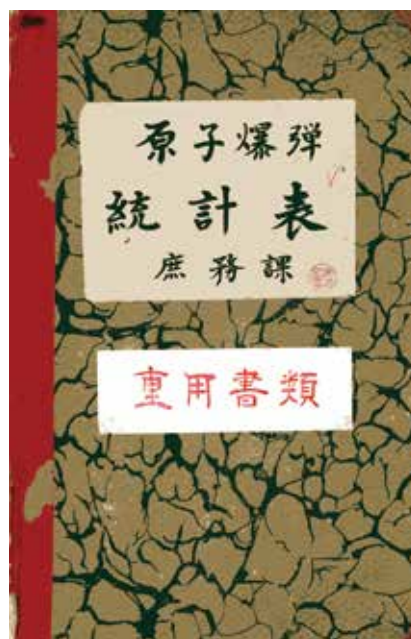
### Ba03 遺骨引渡一覧表

遺骨引渡しの際の受取書の綴りである、昭和20年8月から12月の間に引き渡したものである。受取書には裏紙が使用されており紙が不足していたことが伺える。



### Ba04 原子爆弾統計表

庶務課で作成された事務、基礎および臨床教室の職種ごとの生存者と死亡者数が記載されている。入院患者、付添人についての記載もある。



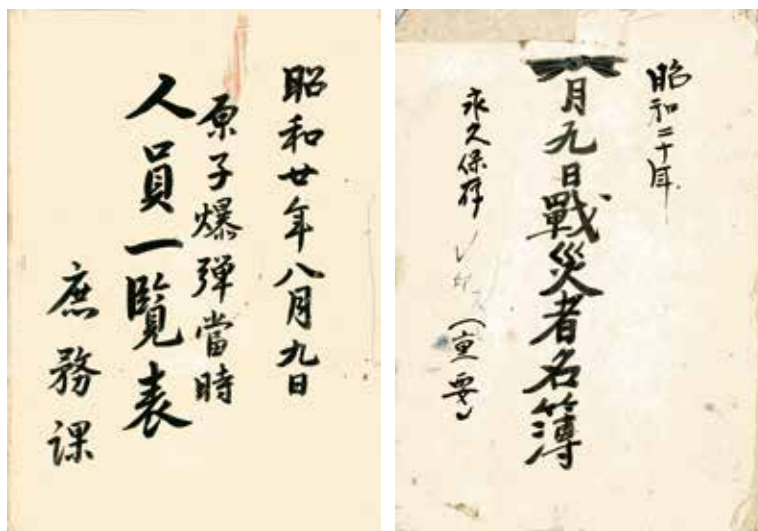
## Ba05 原爆当時の死亡者及び生存者名簿

事務、臨床および基礎の教室別に死亡者及び生存者別に職名、氏名が記載されている。



## Ba06 原子爆弾当時人員一覧表および戦災者名簿

職員および学生の生存者と死亡者の人数が記載されている。職員は生存411名、死亡346名。入院患者及付添人では生存54名、死亡73名。医学生は生存189名、死亡146名、不明32名、医専は生存144名、死亡254名、不明26名、薬専は生存171名、死亡40名とされている。戦災者名簿には死亡者氏名、8月9日現在の俸給月額、在職年数が記録されている。



人員一覧表

[https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/materials-data/jinin\\_list.html](https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/materials-data/jinin_list.html)

Ba07 原爆犠牲者名簿（職員・看護婦）

附属医院各診療科における死亡者と遺族の続柄、住所が記載されている。



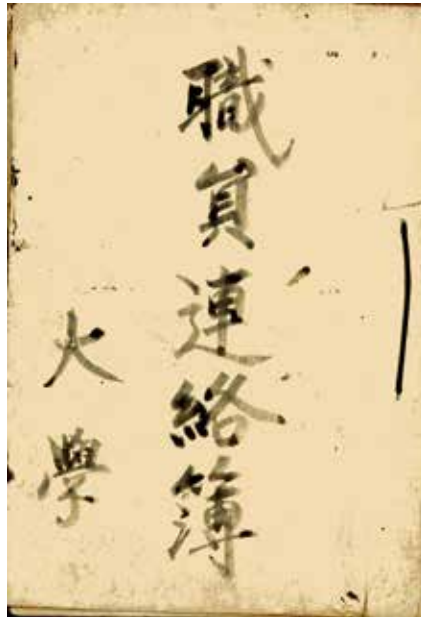
Ba08 長崎医科大学・職員連絡簿

附属医院、診療科別死亡者の住所録で遺族名の記載がある。



## Ba09 大学・職員連絡簿

診療科別職員の住所録で、生死の区別が記載されている。



## Ba10 戦災死亡者連絡先調査

昭和21年4月、長崎医科大学庶務課より附属病院へ出された連絡先調査の依頼文書である。



### Ba11 遺族手当名簿

死亡者、遺族の氏名および支給額が記載されている。

死亡者名	遺族氏名	支給額
山根 幸三郎	山根 幸三郎	...
山根 幸三郎	山根 幸三郎	...
山根 幸三郎	山根 幸三郎	...
山根 幸三郎	山根 幸三郎	...
山根 幸三郎	山根 幸三郎	...
山根 幸三郎	山根 幸三郎	...
山根 幸三郎	山根 幸三郎	...
山根 幸三郎	山根 幸三郎	...
山根 幸三郎	山根 幸三郎	...
山根 幸三郎	山根 幸三郎	...

### Ba12 功績調査の件

昭和21年4月、功績調査として庶務課から出された8月9日の勤務状態の調査票である。

功績調査の件  
昭和二十一年四月  
本課長 出賀 不灯  
庶務課長 出賀 不灯

氏名	調査日
山根 幸三郎	8月9日
山根 幸三郎	8月9日
山根 幸三郎	8月9日
山根 幸三郎	8月9日
山根 幸三郎	8月9日
山根 幸三郎	8月9日

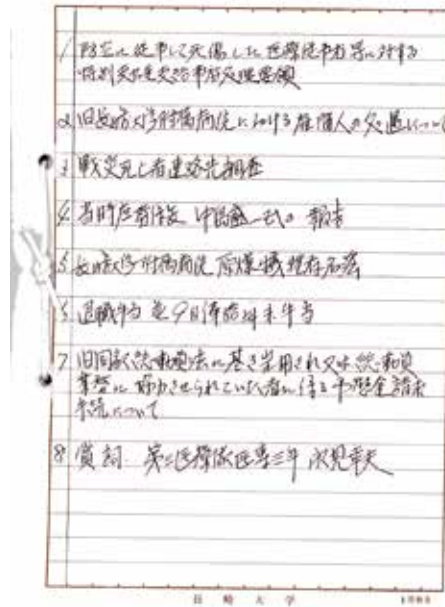
Ba13 防空に従事して死傷した医療従事者等に対する特別支出金関係綴  
長崎大学医学部附属病院関係文書綴である。



Ba14 防空医療業務従事者関係書類

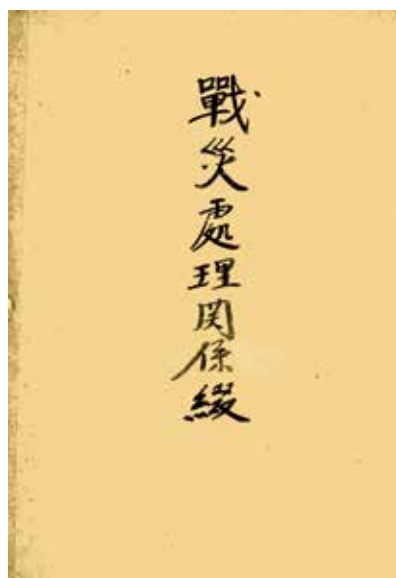


## Ba15 死傷医療従事者に対する特別支出金支給事務処理要領ほか



## Ba16 戦災処理関係綴 (昭31)

昭和31年4月19日付、長崎県民生労働部長から長崎大学医学部長に宛てられた戦時災害の死亡者に関する調査依頼等の文書綴りである。





### Ba17 弔意金請求に関する調査依頼文書（昭31）

昭和31年4月18日付、長崎県民生労働部長から長崎大学医学部附属病院長に宛てられた弔慰金請求に関する調査依頼文書である。当時救護班業務に従事するなど旧国家総動員法に基く徴用又は総動員業務へ協力していた者には国家補償として弔意金が支給されているとの記述がある。



### Ba18 弔意金請求手続きに関する変更通知文書（昭31）

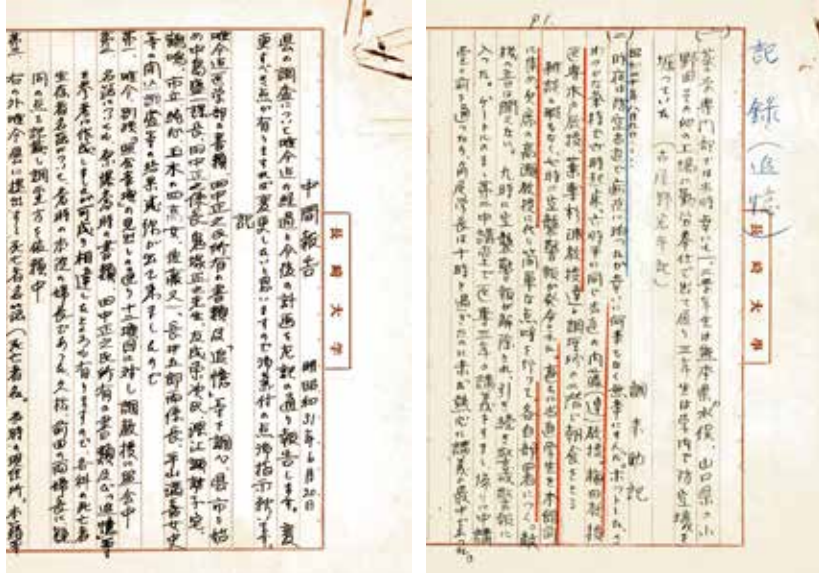
昭和31年5月16日付、長崎県民生労働部長から市町村長・福祉事務所に宛てた弔慰金請求手続きの処理変更の通知である。





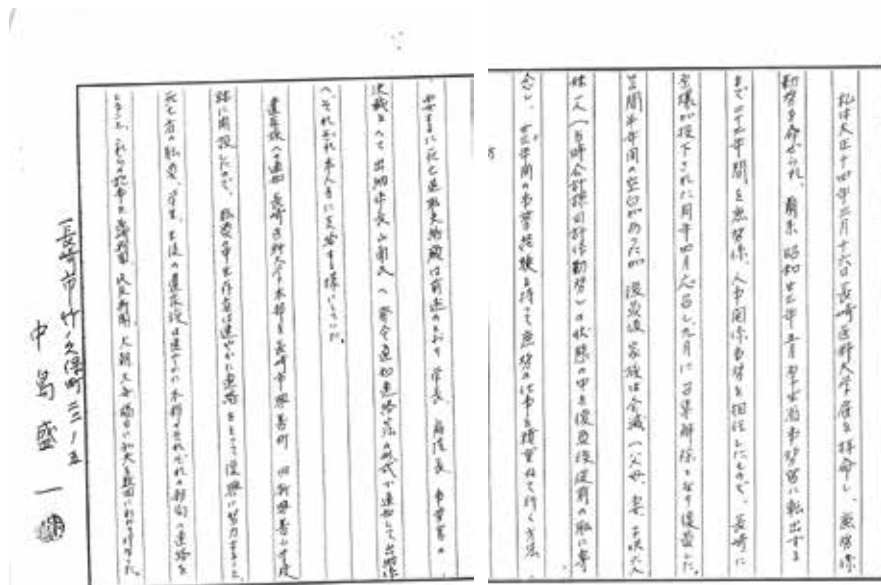
## Ba19 弔慰金請求に関する中間報告 (昭31)

昭和31年6月20日の病院庶務係 山本源之助氏による調査の中間報告文書である。原爆当時の勤務などの状況確認のため「追憶」の記述が抜粋されている。



## Ba20 庶務係長報告文書

当時庶務係長であった中島盛一氏の被爆後の職務内容等が記載されている。写し3部。



## Ba21 附属医院・缶場職員の死亡退職金調査に関する文書（昭47）

昭和47年2月28日付、死亡退職金の調査文書の写しである。戸籍謄本の写しが添付されている。

昭和47年2月7日付、七本院缶場勤務、文書  
技師長岡氏の未亡人三ノ木さんか、厚生局長の御存念  
に付添入して事務部長の御内、岡氏死亡退職金  
と文書とをこの日から調査してほしい、御返答の  
まで調査した。

2. 調査の結果  
退職金の計算書は完全に行き届いていない  
書類が存在しているが、文書事務上の誤り、書類を  
作成していないので、確認は不可能である。  
注：文書事務上の誤り、確認不可能、御返答のまで調査した。

3. 所見  
現在の書類と過去の関係は、把握しにくい  
状況、文書と書類との確認と判断が必要。

4. 所見の総括  
本件死亡者の遺族が御存念、御返答のまで調査した  
調査した。附：戸籍謄本一紙添付した。

死亡退職金の調査と関係は、御返答のまで調査した。

## Ba22 旧長崎大学附属病院における雇用人の処遇について（昭55）

昭和55年11月10日に開催された旧長崎大学附属病院雇用人遺族会からの決起集会案内である。長崎県被爆者手帳友の会 会長 深堀勝一氏の名がある。

旧長崎大学附属病院における  
雇用人の処遇について

昭和二十年八月九日長崎市に投下された原子爆弾によって推定  
七万余の犠牲者があったことは世人のよく知るところであり、  
その際、長崎大学病院には多数の官文雇用人、医学部勤務員は  
勲章を一徳一心となって総動員業務に日夜懸命に勤め、散り  
る状態であった。

しかしながら不幸にもあの原子爆弾は頭上に炸裂し多数の死傷者  
を生じ、戦争は終結するとはいえ、多量な死傷者を生じ、戦争機  
械者には、困窮は軍人軍属に比して戦傷病者、戦没者遺族等  
被爆法で昭和八年に制定し、昭和十四年に至って学役勤務  
女子挺身隊、雇用人に適用の中であり、昭和二十一年に至って、  
商売軍属に適用されることになり、昭和二十一年に至って、

## Ba23 戦傷病者戦没者遺族等援護法改正の公布（昭44）

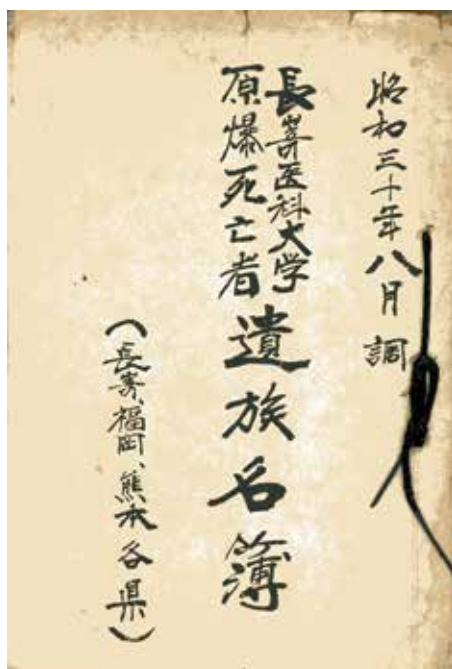
昭和44年7月15日、昭和45年6月25日および昭和49年5月20日付けの戦傷病者戦没者遺族等援護法改正が公布された際の官報の写しである。



## (2) Bb 慰霊祭関連

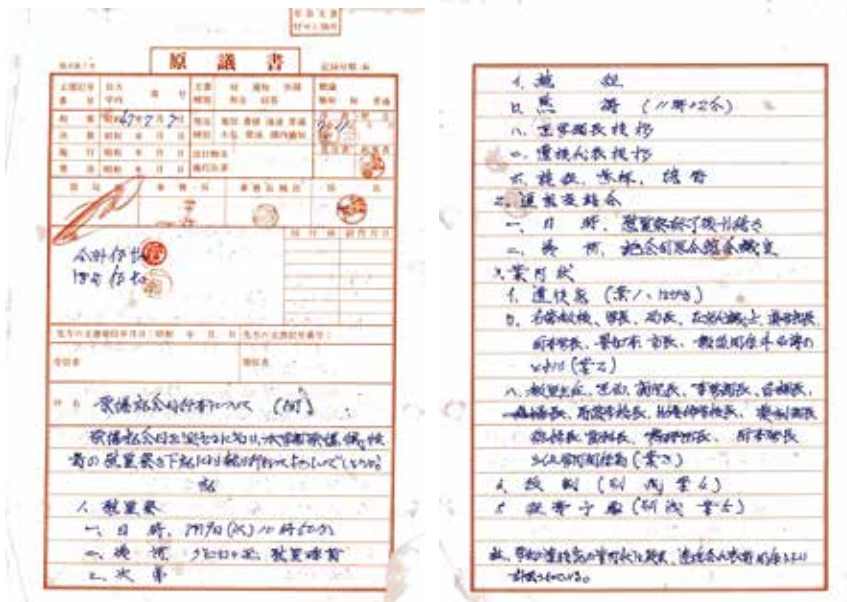
### Bb01 長崎医科大学原爆死亡者遺族名簿（昭30）

昭和30年8月に調査された長崎、福岡、熊本各県分の遺族名簿である。



### Bb02 原爆記念日行事について原議文書（昭47）

昭和47年7月7日起案、式次第、案内文、遺族名簿など、グピロが丘で開催すること等の案についての伺い文書である。



### Bb03 昭和47年度原爆犠牲職員学生慰霊祭

昭和47年度慰霊祭の参加者名簿である。





Bb04 原爆犠牲職員学生名簿 (昭55)

昭和55年10月28日、慰霊祭用の犠牲者及び遺族 (除医学生) の名簿である。



(3) Bc 原爆以前

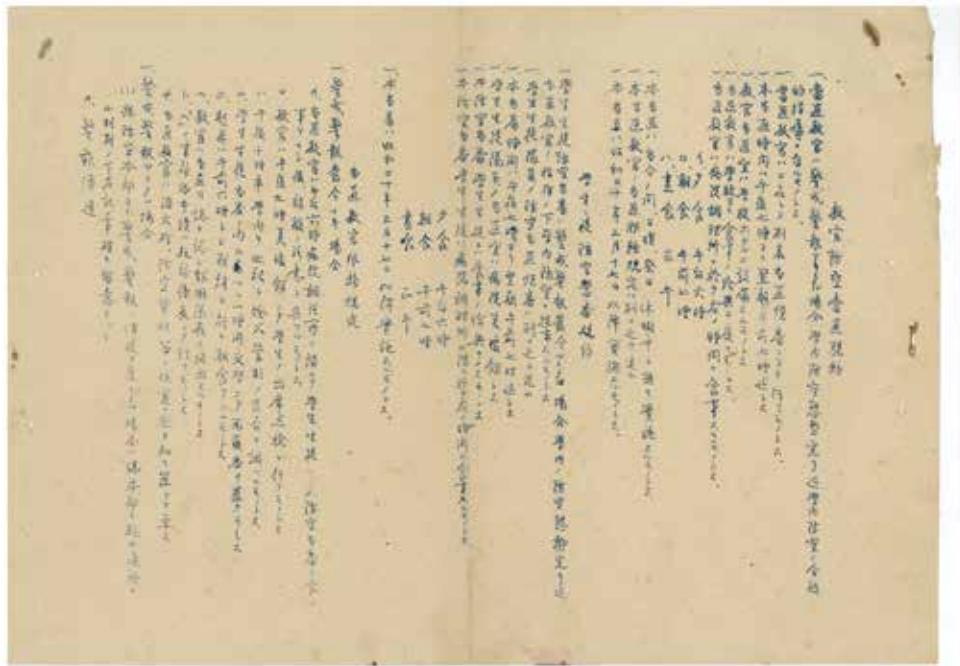
Bc01 長崎医科大学報国団役員名表

昭和19年の報告団役員名簿である。部長、理事、班名、班長、書記、幹事が記載されている。団長：角尾晋、副団長：平井教授、江口専門部主事。

The table is a handwritten record of club members, organized into columns for different departments and roles. The columns include names, titles (e.g., 部長, 理事, 班長), and other identifying information. The text is written in black ink on aged paper. On the right side of the table, there is a vertical inscription: 長崎医科大学報国団役員 (Members of the Chikuzen Club, Nagasaki Medical University).

## Bc02 防空当直規約

教官および学生の防空当直規約および当直教官服務規定である。当直教官は2名、当直時間は午後7時から午前7時、食事時間は夕食午後6時、朝食午前7時、昼食は正午とすること等が定められている、昭和20年3月17日以降実施するものとする」と記されている。



## (4) Bd その他

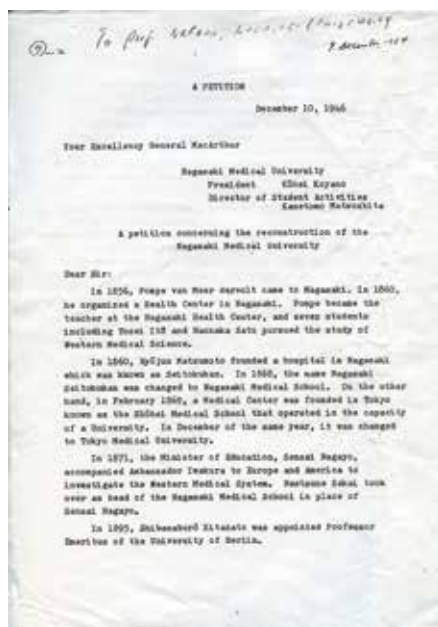
### Bd01 文部大臣弔辞

昭和20年11月2日、当時の前田多門 文部大臣から長崎医科大学の殉難者に対する弔辞である。



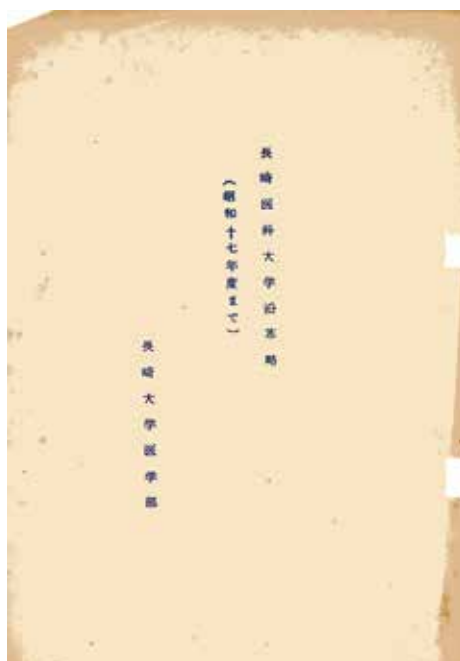
## Bd02 マッカーサ元帥への嘆願書

1946年12月10日、マッカーサ元帥に宛てて、古屋野宏平学長と学生主事の松下兼知助教授の連名で長崎医科大学の再建を願う嘆願書が提出された。1984年12月9日、原爆当時の精神科助教授であった松下兼知氏より精神科中根允文教授にコピーが渡された。原本は松下美術館に所蔵されている。



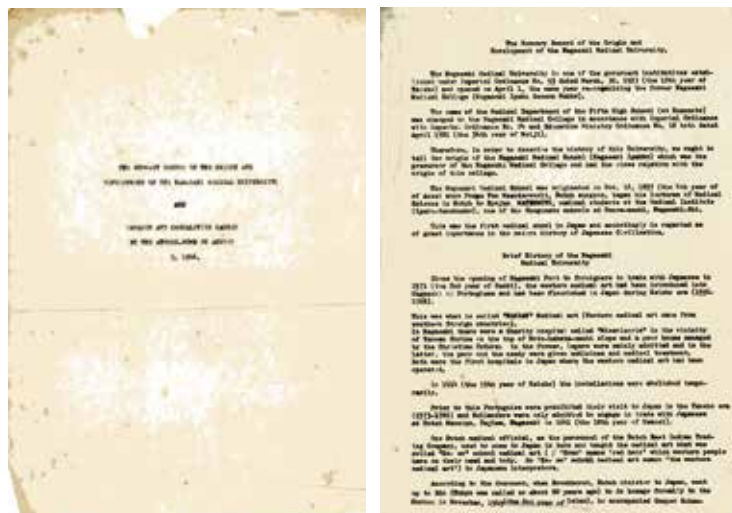
## Bd03 長崎医科大学沿革略（昭和17年まで）

医科大学再建に向けたものと考えられる。全28頁。2部。



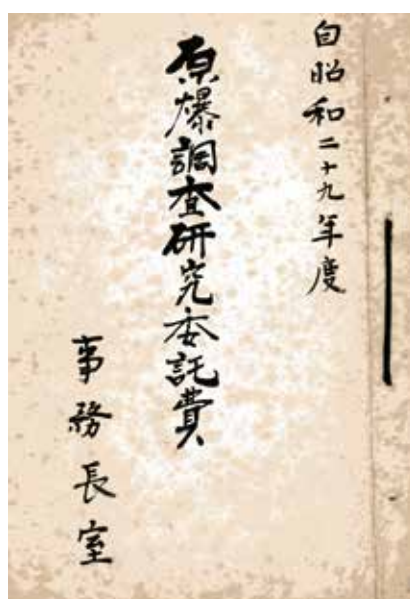
## Bd04 長崎医大の被害状況（英文）

表題は The summary record of origin and development of the Nagasaki Medical University and damages and casualties caused by the atomic-bomb とされている。1946年8月9日付、長崎医科大学の発祥、歴史と共に原爆投下前の敷地面積、建物の状況、投下後の被害状況について記述されている。全10頁。



## Bd05 原爆調査委託費（昭29）

昭和28年4月1日付および昭和29年4月1日付の国立予防研究所長 小林六造と長崎大学医学部長 北村精一との間の契約書がある。昭和29年度より昭和31年度までの被爆者の検査費や研究費などの記録である。

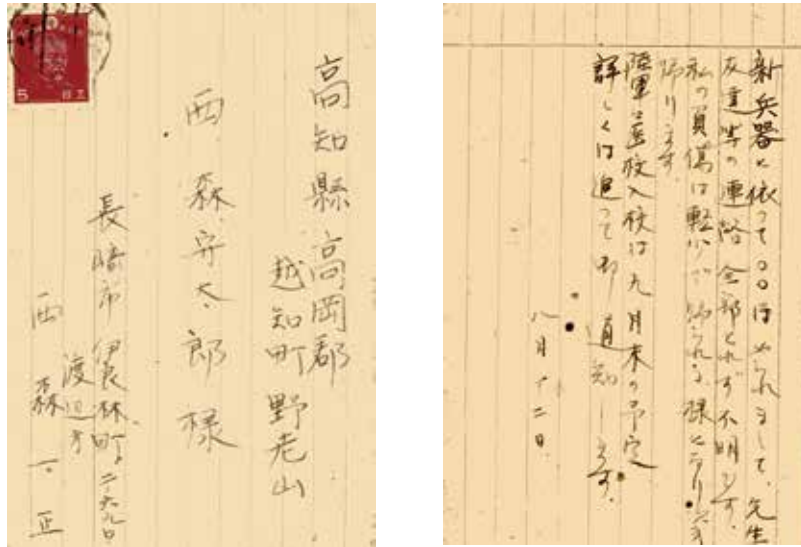




## C 私信・手紙

### C01 西森一正氏が父親に宛てた私信

原爆投下後の8月12日、当時学生であった西森一正氏（長崎大学名誉教授）が自分の無事を高知の父親に宛てた葉書、原本である。検閲を抜けるために、「〇〇はやられました」と「大学」と書かなかった。



### C02 西森一正氏の「原子爆弾救護報告」の説明私信

1996年7月18日、相川忠臣教授に宛てた永井 隆の「原子爆弾救護報告」についての説明である。永井隆の第11医療隊および調 来助の第6医療隊のことが書かれている。



### C03 泰山弘道氏に宛てたホーン医師からの私信（8通）

1956年から1958年間のホーン医師から泰山弘道氏宛に届いた手紙やクリスマスカードである。1959年には孫の瓜生田和孝氏への手紙もある。



### C04 永井 隆の葉書

永井隆から菅井幸子様（詳細不明）あての絵葉書



## C05 永井 隆の書「平和を」の絵葉書

絵葉書として販売されているもの。



---

## D 寄贈・遺品

---

### D01 西村トシコ氏の回想画

当時、医専1年生だった兄の柴田正人氏を探してお母様と二人で校内に来られた際の様子を2015年に、記憶をたどり描いていただいたものである。黒焦げの瓦礫、茶毘の様子、講義室跡で白骨化した頭蓋骨が投下前そのまま整然と並んでいる様子が描かれている。2015年8月9日に寄贈され、原爆医学資料展示室に展示している。



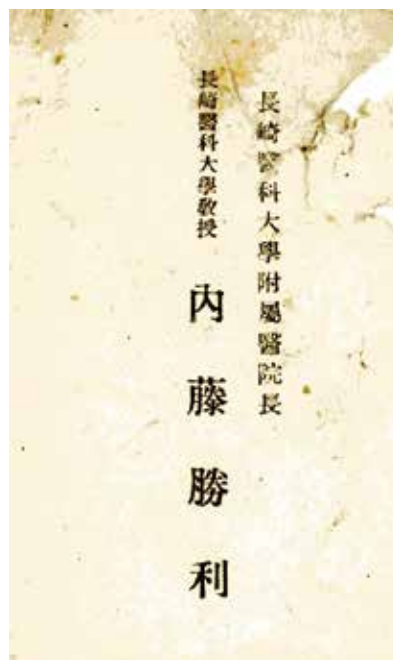
## D02 角尾 晋 学長の写真

当時の長崎医科大学学長 角尾 晋氏の肖像写真である。



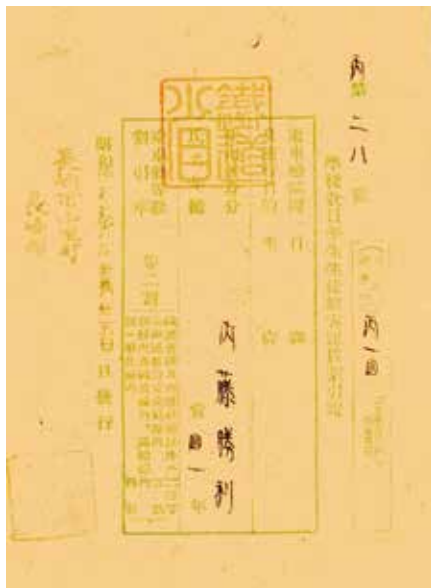
## D03 内藤勝利教授の名刺

原爆当時、長崎医科大学附属病院長であったが爆死された。



## D04 内藤勝利教授の旅客運賃割引証

内藤勝利教授の教員旅客運賃割引証（昭和19年3月発行）である。



## D05 原爆見舞い葉書

原爆後、日本赤十字産院の久慈直太郎先生から内藤勝利教授あてに届いた原爆見舞いである。

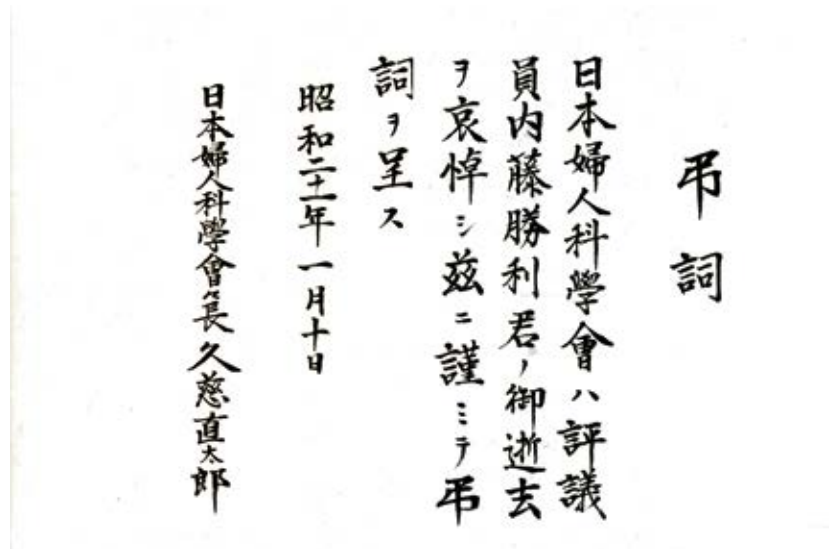


D06 内藤勝利教授の写真



D07 日本婦人科学会長弔辞

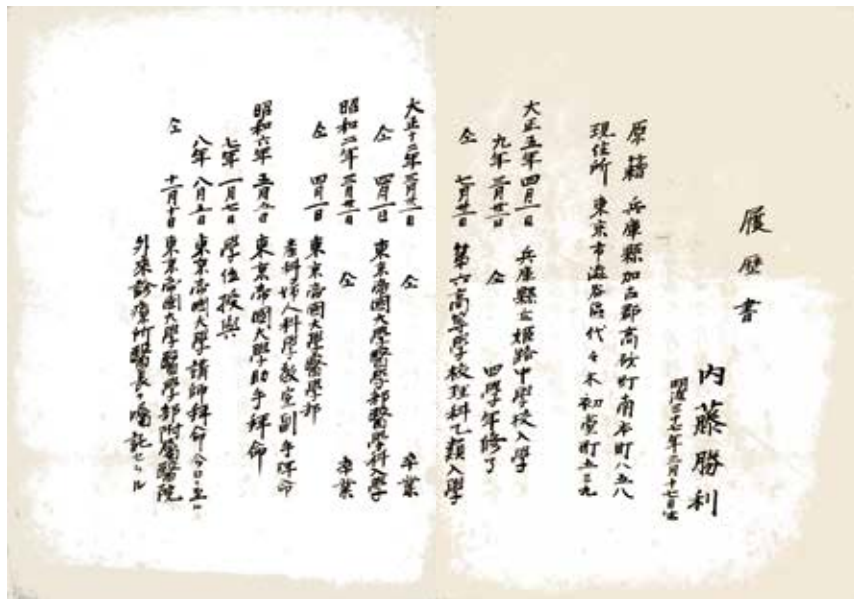
昭和21年1月10日、日本婦人科学会長の久慈直太郎先生から故内藤勝利教授に送られた弔辞である。



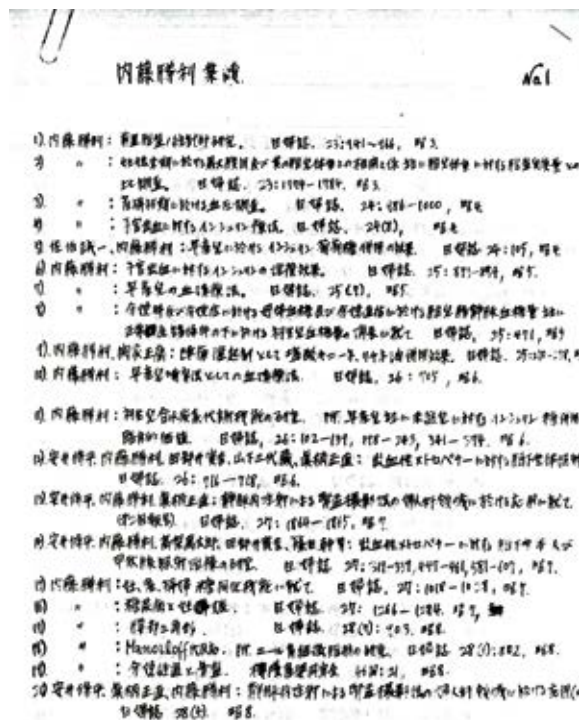




D10 内藤勝利教授の履歴書



D11 内藤勝利教授の業績





## D12 内藤勝利教授の遺品寄贈記事等

昭和56年5月23日、内藤勝利教授の遺族が遺品を国際文化会館と医学部に寄贈した新聞記事と寄贈品一覧である。



長崎新聞 1981年5月23日

## D13 文部大臣弔辞

昭和20年11月2日、合同慰霊祭での前田多門 文部大臣の弔辞である。寄贈された内藤勝利教授の遺品に含まれていた。



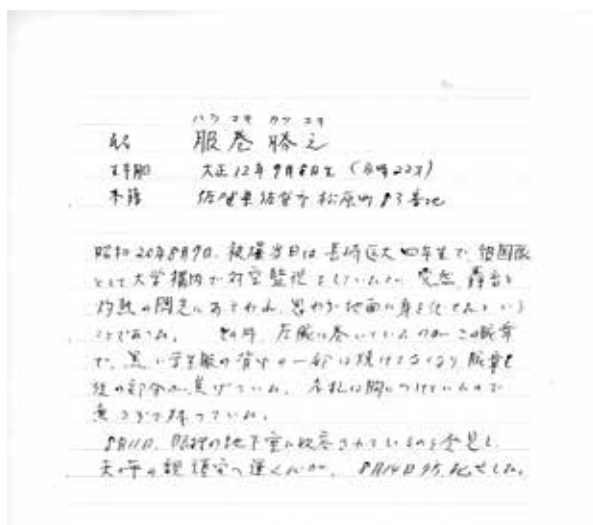
## D14 小寺健次郎氏の出征寄書と腕章

平成7年7月13日、小寺健次郎氏より池田高良医学部長へ寄贈されたもの。長崎医科大学附属薬学専門部の学生17人が出征する級友の小寺氏のために日章旗に寄せ書きしたものである。



## D15 服巻勝之氏の名札と腕章

長崎医大4年生であった服巻勝之氏の名札と腕章である。原爆医学資料展示室に展示している。



## D16 鬼塚正之氏の手記

長崎医専の事務職員であった鬼塚正之氏が当時の記憶を平成2年に記した手記である。平成11年に同氏の次女から同窓会へ寄贈された。



## D17 亀本近六氏の遺品

当時、守衛であった亀本近六氏から寄贈された昭和18年当時の集合写真と被爆時着用していたゲートルである。平成13年6月4日、長男 隆氏より寄贈された。



医大病院守衛一同 後列左端が亀本氏  
昭和18年6月18日撮影



## D18 野上義雄氏の遺品

昭和27年卒、野上義雄氏の遺族から寄贈された6枚の被爆時の写真である。



## D19 田中和子氏の遺品

当時、職員であった田中和子氏の名札と長崎医大報国隊の腕章である。平成24年8月9日、遺族の田中幸恵氏より寄贈された。



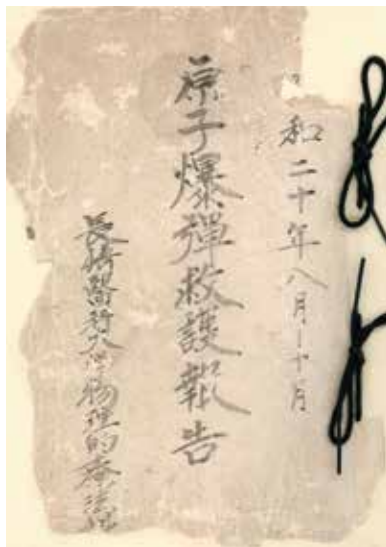
## D20 青木義勇教授の遺品

当時、細菌学教授であった青木義勇教授が使っていた長崎医科大学のバックルである。平成27年7月18日、御息女の青木美代子氏から寄贈された。



## D21 原子爆弾救護報告の複製品

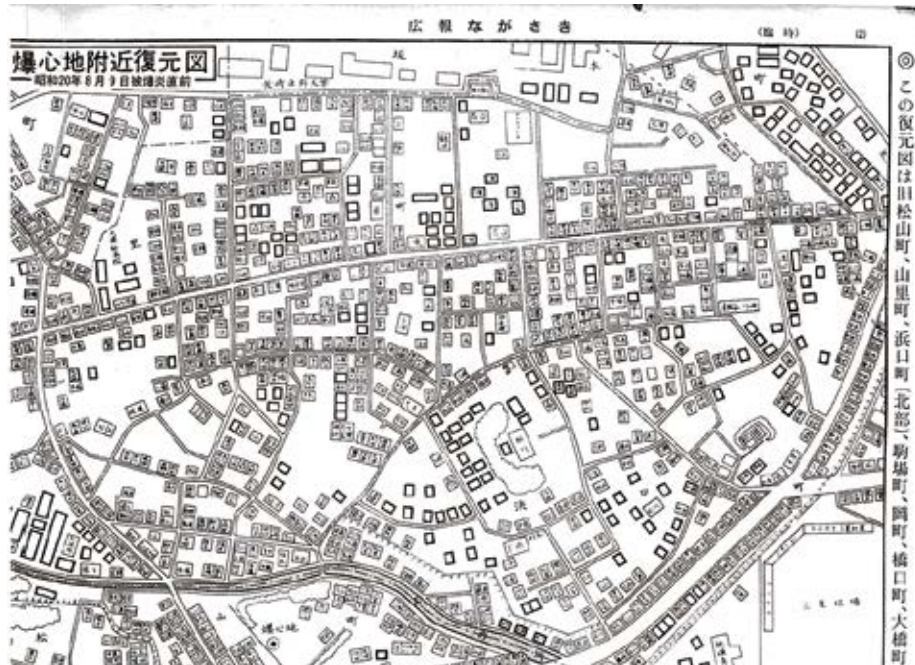
長崎医大第11医療隊 隊長 永井隆の原子爆弾救護報告の複製品である。原爆医学資料展示室に展示している。





## D22 復元地図

昭和47年7月1日付、広報「ながさき」に掲載された爆心地付近の復元地図の写しである。



---

## E 雑誌・新聞記事

---

### E01 朝日ジャーナル (1959年)

1959年3月20日の朝日ジャーナルVol.26 No.32で「原爆を落とした男たち」精神科医の分析が特集された。





## E02 週刊朝日 臨時増刊 (1970年)

1970年7月25日の臨時増刊に永井 隆の原子爆弾救護報告の全文が臨時増刊として発刊された。3冊所蔵。



## E03 TIME誌表紙 (1995年)

1995年8月7日発行のTIME誌の表紙に長崎医科大学の原爆被害写真が掲載された。長瀧重信元医学部長がTIME誌に当時の医科大学の被害状況と二度と核が使用されないことを祈るといった内容のメッセージを送った。



## E04 TIME誌へのメッセージ掲載 (1995年)

長瀧重信元医学部長がTIME誌に送ったメッセージが1995年8月28日付TIME誌Lettersに掲載された。  
 “I only pray that this will never happen again.”



## E05 ルモンド紙意見広告 (1996年)

1996年1月28日、医学部の教官と学生の有志が核実験の強行を続けるフランスの有力紙ルモンドに核実験停止を呼びかける意見広告を掲載した。



1996年8月7日、朝日新聞の論壇に大学医学部教官会議代表であった片峰 茂氏の「核実験と被爆医科大学」が掲載された。片峰氏は後に第14代学長となった。

# 論壇



片峰 茂

中国による地下核実験が七月十九日に再び進行された。昨年九月より今年一月にかけて六回にわたって実施されたムルロア環境でのフランス核実験と同様、包括的核実験禁止条約(CTBT)署名を前提とした駆け込み実験である。「中国はあと一回をやめよ」という核兵器(実験)全廃を願う人類共通の声は、またもや無視された。

私が所属する長崎大学医学部は、原爆被災の体験を有する世界唯一の大学、長崎医科大学をその前身とする。一九四五年八月九日に投下された長崎原爆により、爆心から六百メートルにあった大学は壊滅し、千人以上の

教職員、学生、患者の命が奪われた。昨年は五十周年の節目の年にあ

## 核実験と被爆医科大学

され、長崎大学医学部教官と学生の名前がフランスのルモンド紙に意見広告を掲載することになった。「核兵器の保有が、本当に平和をもたらすのでしょうか」という見出しで始まる意見広告は、明確に核兵器廃絶を主張し、従って核抑止論の正当性に対峙(たいじ)する内容となった。意見広告は一月二十七日、六回目的フランスの核実験当日に掲載され、その二日後にシラク仏大統領が核実験禁止を演説した。

その後、この意見広告に対して三十有数の反応がインターネットなどを介して国内外より寄せられた。数々のうえで支持・反論相半ばしたのが、フランスの科学者たちからのメッセージの多きが核抑止論肯定に基

たり核廃絶への願いを新たにしたり、折しも再開・強行されたフランス・中国による核実験は私たちの思いに水を差すのに十分なものであった。早速、若手教官、学生より「核兵器廃絶の立場は世界唯一の被爆医科大学における教育・診療・研究の原点であり、その立場を今こそ内外に明らかにすべきだ」との提議がな

あり、核廃絶の立場に立たないかぎり、CTBTや核不拡散条約(NPT)は核保有国の地帯に留してしま

らう。このような核保有国の認識ではインドなどの核開発能力を有する非保有国すべてをCTBT締結へ向かわせるのはなかなか難しからう。そもそも核抑止論とは、核兵器使用によって人類にもたらされた未曾

有(みぞろ)の悲惨の経験の原点とする点で核廃絶論と出発点は同じである。広島・長崎における被爆者の死と彼らを受けた祖傳があまりに凄惨(せいかん)であったので、理性を備えた政治指導者であれば、威嚇のための核は保有しても、未來水劫(えいご)のような攻撃はしないであろうという理屈である。多くの広島・長崎の犠牲者や現在も後(こう)障害と戦う被爆者の存在

が、核保有正当化のための根拠となるとすれば、これ以上のニヒリズムはあるまい。

長崎大学医学部における原爆後障害研究は、わずかに生き残った医師たちによる被爆後の放射線障害の症状と治療の記録に始まり、その後付属原爆後障害研究施設を中心として密々と続けられてきた。白血球などの血液系腫瘍(しゅよう)を中心とした晩発性被爆害の発生は、核心とした非人間性を人々にますます認識させるものとなった。後原爆の姿態や発症機構を客観的に明らかにして行く科学的努力が、真に歴史的な価値をもつためには、やはりその先には核廃絶がなければならないと思う。長崎原爆は自らの原点の一つである。父兄が被爆経験を有する点で被爆二世であること、長崎で生まれたこと、そして何よりも現在この大学に在籍していることが大きいように思う。

長崎大学医学部が世界唯一の被爆医科大学であるという事実は重い。次代を担う、戦争も原爆ももちろん知らない、戦後第三世代の現役医学生たちにも、この認識が浸透しつつあることは心強い。彼らは、被爆体験記の英訳作業など地道な活動を既に始めている。この大学は、これから先も世代を超えて核廃絶を世界へむけて主張し続けるに違いない。

(長崎大学医学部教官会議代表、同大助教授・細胞学II教授)

---

令和2年度  
医学部原爆犠牲者慰霊祭  
および  
過去の講話記録

---



# 文部科学大臣メッセージ

## (被爆75周年に寄せて)

本日、被爆75周年を迎える長崎大学医学部原爆犠牲者慰霊祭が執り行われるにあたり、犠牲者の御霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

75年前の今日、投下された1発の原子爆弾によって、我が国の近代西洋医学教育発祥の医学校である長崎医科大学、附属医学専門部、附属薬学専門部、附属医院、東亜風土病研究所、看護婦寄宿舎等は、一瞬のうちに壊滅し、夏休み返上で授業が行われていた最中の学生、教職員合わせて898名もの尊い命が奪われてしまいました。志半ばで非業の最期を遂げられた学生、教職員の無念さを思うと、お慰めの言葉もございません。また、犠牲となられました方々の御遺族の悲しみと今日に至るまでの御労苦は、いかばかりかと拝察する次第でございます。この忌まわしい災禍により、人的、物的それに精神的にも絶望の淵にあって、廃校の危機に直面しながらも、先人の弛まぬ献身的な御努力によって、長崎医科大学は再起し、昭和24年5月には国立学校設置法の公布・施行により、新生、長崎大学医学部となり、その後の幾多の困難を克服して今日を迎えておられます。このような歴史を持つ長崎大学医学部は、原爆被爆者の後障害研究を力強く推進し、その後、医学部から派生した原爆後障害医療研究所は、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故を契機に国際レベルでの放射線医療支援、分子疫学調査とその活動範囲を拡大し、世界的にも多大な貢献をしてこられております。これ

らの研究活動や実績が、9年前、福島で起きた原発事故後の福島県立医科大学の緊急被ばく医療の再構築、福島県民へのリスクコミュニケーションと健康調査の実施や、大学院教育を通じて、我が国のみならず国際的な人材育成などに大きく生かされているところでございます。また、長崎大学は、学問的調査・分析を通して核兵器廃絶に向けた情報や提言を世界に発信することなどを使命とする国内唯一の教育研究施設として、核兵器廃絶研究センターを8年前に設置され、世界平和のための教育・研究に取り組んでおられます。今後、放射線被ばく医療等の研究や核兵器廃絶への研究が益々発展し、今なお、放射線障害で苦しむ世界の人々や恒久平和を希求する世界の人々に貢献されますことを心から願って止みません。

最後になりますが、政府といたしましてもこのような悲劇を二度と繰り返すことのない平和な世界の実現に向けて努力する所存でございます。改めまして、犠牲となられた方々の御冥福と御遺族の皆様の方々の今後の御多幸、並びに長崎大学の益々の御発展をお祈り申し上げ、御挨拶とさせていただきます。

令和2年8月9日

文部科学大臣 萩生田 光一



# 令和2年度 医学部長式辞

長崎大学医学部長

前村 浩二

本日は猛暑の中、長崎大学医学部原爆犠牲者慰霊祭にご列席いただき誠にありがとうございます。長崎に原子爆弾が投下されてから75年目の夏を迎え、今年は記念事業として大々的に原爆犠牲者慰霊祭を開催する予定にしておりましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、やむなく3密を回避した状態で開催させていただくことになりました。

1945年8月9日午前11時2分、世界で2発目の原子爆弾により、長崎医科大学と附属医院は壊滅状態となり、夏休みを返上して講義や実習に参加していた学生および教職員、898名が一瞬のうちに原子爆弾の犠牲となりました。ここに亡くなられた方々とそのご遺族に対し深く哀悼の意を表します。

今年は原爆復興75周年となりますので、「継承」をテーマとして記念事業を行っています。被爆者の高齢化が年々進む中で、被爆体験をどう継承していくかが今問われています。

被爆を体験された方々の言葉と共に、当時の写真は多くの人々の心を動かします。昨年11月にローマ教皇が長崎を訪れ、爆心地公園で核兵器が人道的にも環境にも悲劇的な結末をもたらすことを訴えるメッセージを全世界に向けて発信されました。その際に傍らに置かれた「焼き場に立つ少年」の1枚のパネル写真に胸を打たれました。

二度とおこしてはならない原爆の悲惨さを、全世界に広めたいと考えた人たちの中に、被爆当時の大村海軍病院長で、被災者の治療にあたられた泰山弘道先生がいらっしゃいます。

本年7月17日には、泰山先生の孫にあたる瓜生田和孝氏による「長崎原爆の記録」が全世界に伝わるまでの長い道のり」と題した記念講話が行われました。本学の卒業生である泰山先生は、永井隆先生の勧めもあり原爆の惨状について米国民にも知ってもらう必要があると考え、「長崎原爆の思い出」を執筆され、また英文にも訳されてい

ました。しかし当時の状況から長い間出版されることはありませんでしたが、1984年に「長崎原爆の記録」として出版され、その後2007年には「完成版 長崎原爆の記録」の題名で全記録が出版されました。また英文原稿は、2005年に本学名誉教授の山下俊一先生のご尽力により「Collection of Memory of the Atomic Bombardment of Nagasaki 1945-1955」として出版され、国連本部、WHOなどに送付され、長崎原爆の記録を世界に知らせるという泰山先生の悲願が達成されました。こうして50年あまりの歳月を経て、原爆投下後の惨状が、ようやく世界中の多くの人の目に触れるようになった話を瓜生田氏から伺いました。

この講話は医学科1年生の講義の一環としても行われ、今年入学した新入生にも原爆の悲惨さ、そしてそれを継承して行くことの重要性が伝わったと思います。さらに記念事業では「追憶」の複製版、「忘れな草」の製本、記念誌の発行などを通じて原爆の体験を後生に継承して行くことにしています。

長崎大学は現在河野学長の下、プラネタリーヘルス、すなわち地球の健康をスローガンとして掲げ、全学で団結してさまざまな取り組みが始まっています。核兵器の使用は、人類のみでなく地球環境にも壊滅的な破壊をもたらす、プラネタリーヘルスにとって最大の敵であることは言うまでもありません。国内唯一の被爆医科大学である長崎大学医学部は、「長崎原爆の記録」の最終章である「原爆よ再び地上に落つるなかれ」の言葉を胸に刻んで、今後も核兵器廃絶に向かって努力して行く所存です。

最後になりますが、75年前、一瞬のうちにその尊い命を奪われた先輩方の無念に思いを馳せながら、すべての被爆者の御霊のご冥福をお祈りし、追悼の言葉といたします。

令和2年8月9日

## 令和2年度 講話

長崎大学名誉教授  
相川 忠臣

今年被爆75周年を迎えました。良順会館の下にある被爆遺構のゲストハウスのコンクリート壁は白く塗りなおされたのに、また黒ずんできました。戦前のコンクリートはセメントに川砂と小石を混ぜて突き固めていました。その中にコークスか石炭灰が含まれていたのでしょうか。被爆の高熱で溶けて白く塗っても、塗っても、黒ずむ繰り返しが75年も続いています。傾いた長崎医科大学門柱とともに大切な被爆遺構であります。

臨床各科の病棟は頑丈なコンクリートであり、放射線を遮り約半数が生き残りました。被爆を耐えぬいた黒ずんだコンクリートの病棟で学生時代、臨床教育を受けましたが、全て壊され残っていません。

被爆50年の年に長崎医科大学の被爆資料の調査を原研資料室の三根眞理子教授とともにに行い、被爆50周年記念に発行した長崎医科大学原爆記録集第一巻に報告しました。

図書館医学分館には被爆資料の入った3つの封筒がありました。原子爆弾調査書と古屋野学長が大書された袋には、原子爆弾災害調査研究特別委員会の資料と永井隆先生の古屋野学長にあてた被爆一年後の医科大学各所の残存放射能測定結果報告書がありました。2つめは巡回診療班病歴カルテ137枚とその間の事情を説明した書簡でした。3つめは長崎医科大学医師11名の原子爆弾体験記録の自筆原稿です。

原子爆弾調査研究を統括する連合国軍GHQが第一級の原爆資料として機密扱いにしたのでしょう。長崎医科大学から原子爆弾調査結果として日本政府都築正男調査団に提出されながら公表されなかった3つの重要資料があることが分かりました。

1つは 昭和20年8月9日長崎医科大学職員其他所

在場所調査です。2つ目は長崎医科大学医師11名の原子爆弾体験記録、3つ目は調教授が中心となって纏められた長崎原子爆弾災害調査統計資料であります。

1つめの長崎医科大学職員所在調査の2つの原資料が見つかりました。一つは附属病院庶務係の昭和20年8月9日原爆当時の死亡者及び生存者名簿であり、元庶務係の山口麗子さんから朝長万左男原爆後障害医療研究施設長に届けられました。医学部庶務にもあるはずと思い探してみると、昭和20年8月9日原子爆弾当時人員一覧表がありました。この二つの資料からこれまで全くわからなかった入院患者の被爆状況がわかりました。入院患者は僅か107名でした、8月1日、附属医院屋上に赤十字が大きく描かれていたにもかかわらずB24とB25による空襲を受け、6つの250キロ爆弾が投下され、最もひどかったのは産科婦人科病棟であり、屋上から地下まで突き抜ける大穴が空き、炎上しました。調教授の治療の甲斐なく出血多量で医学生3人が死亡しました。その後軽症の患者は退院させました。昭和18年の県医師会への届け出に、附属医院は466の病床数とあるので、3/4が退院し、原爆当時の入院患者は107名と少なかったのです。その内死亡者は二つの資料で53名と54名で1名の違いがあります。付添人は20名いましたが、その内19名が死亡しました。コンクリートの建物中でベッドを離れなかった患者は半数が生存、健康な付添人は唯一人が生き延びたにすぎません。私は当時2歳半、母の実家が、大学病院下、今の哲翁内科医院付近にありました。B25の襲撃直後、父の実家の琴海町に移り、母と私は原爆を免れ、祖父母二人は原爆で亡くなりました。7月31日の長崎市内の空襲と8月1日の附属医院をめぐりける空襲で3/4の入院患者と浦上の住民の一部も疎開し

ました。しかし医科大学と附属医学専門部の学生と厚生女学部（看護学校）1年生は出席し被爆し命を落としました。上京していた角尾学長が駅から医科大学に直行して8月8日午前中大詔奉戴日で集合した教職員学生に訓辞されました。東京からの帰途8月7日夜広島を通ったとき軽傷の人々に聞いた被害状況を語られました。被害状況は実に凄惨の極みであった。広島に投下された新爆弾はぴかっと光り、爆風の為に家屋が倒壊し、続いて火災が起こる、爆弾は落下しない。上空には異様な形の雲乃至異常な色の雲を見た者、又落下傘を見た者がある。長崎にもすぐ来るであろう。一層の警戒をするように。と夏休暇を返上して医師の非常短期速成の為に授業に出席していた学生に話されたのです。このように書かれていた追憶の影浦尚視第二内科教授の手記には、8日午後の緊急教授会で、8月10日から休講にすると決定せられたとあります。一日遅れました。8月9日にはこれまでどおり附属医院では医学部と附属医学専門部の学生の臨床実習が行われ、原爆が午前11時02分落下しました。附属医院では約310名の教職員学生が死亡しました。原爆当時の名簿から一つだけ取り上げると、看護学校1年生の死亡者は32名（実は33名）、生存者35名でした。基礎医学キャンパスの校舎と事務部のある本館は木造であり、五つの講堂で約400名の学生が授業を受けていました。580-590名は居たであろう基礎キャンパスで生き残ったのは、防空壕を掘っていた薬学専門部学生と教官あわせて6名と、地下の薬品庫で整理をしていた6名、防空壕で金庫の修理をしていた事務官3名、合わせてわずか15名でした。

2つめは、古屋野宏平他11名の医師の原子爆弾体験記録です。医師としての原子爆弾体験記録の序言は長崎医科大学長事務取扱古屋野宏平によって書かれ、教授、助教授、助手、副手、医学生11名の体験記録です。北村包彦教授は和文に加えて英文でも執筆しています。精神科の松下兼知助教授は助教授室で11時2分、左上半身に閃光を浴び、多量の出血があり、白血球300から400まで減少、高熱が続き、22回に及ぶ輸血により瀕死の重傷から奇跡的に生還されました。医師11人の詳細な記

録を読むと被爆後の初期症状を正確に知ることができます。

3つ目は、調来助教授がまとめられた長崎医科大学長崎原子爆弾災害調査統計資料です。医科大学約50人による昭和20年10月から12月までの住民の隣保班の聞き取り調査です。3グループによる原子爆弾調査研究のGHQグループの調査でした。1953年になりMilitary Surgeon に一部が公表されました。1956年に英文の調査報告が日本学術会議放射能影響調査報告刊行委員会により発表されました。ようやく1982年になって調来助、吉澤泰雄著『長崎原爆体験—医師の証言』が東京大学出版会から出版され、全資料が読めるようになりました。その資料では23地域1502名の居住者中559名が死亡しました。爆心地から0.8kmで100%近い死亡率ですが、0.8kmのコンクリートの大学病院は42.3%、1.5kmで50%内外の死亡率が1.6kmで10%台に激減します。1.5-2.0kmでの死亡率は壮年でほとんどなく、10歳以下、11-20歳、61歳以上で15%内外であります。ちなみに2.2kmが100mシーベルトです。

驚いたことに、松下兼知先生が古屋野宏平医科大学学長と松下兼知学生主事の連名による英文の「ジェネラル マッカーサへの嘆願書」を持っておられました。被爆患者を治療する責務のある、ポンペが設立した伝統ある母校の存続を切にうたえておられます。精神科の中根名誉教授より嘆願書のコピーをいただきました。「長崎医科大学の歴史及び原爆被災と復興」という題の長文の英文書類が医学部庶務にありましたが、日付から1946年12月に出された嘆願書に添付された資料とおもわれます。

もう一つ分かったことは附属医学専門部昭和20年9月27日卒業の仮卒業生8名と1名の医師による巡回診療班の活動です。学長の許可を受け、巡回診療班を結成し、9月30日から約20日間、一般市民の家を巡回診療しました。137枚の巡回診療カルテが医学分館にあり、白血球数と病状が記載されています。市内の開業医は医師会の一員として新興善小学校の救護所に詰めるか、兵役に服して一般市民の医療はほとんどなされていませんでし

た。巡回診療は被爆して打ちひしがれた住民を治療し勇気づけ、心から感謝されました。診療班は、巡回診療のかたわら、同級生たちとともに、医科大学と附属病院のご遺骨を200体以上収集し、茶毘に付しました。グビロガ丘の上まで運びあげ、長い倒木の皮をはぎ、慰霊塔とし、その前に「友此処に眠る」と書いた石板を置きました。11月2日の慰霊祭の前に遺骨収集を終了し、古屋野学長に報告したとあります。ご遺骨収集と初代グビロガ丘慰霊碑建立は巡回診療班と同級生たちによるものでした。

被爆50年後に見つかった被爆資料についてお話ししました。ご清聴ありがとうございました。

### 相川忠臣様のご紹介

相川様は、昭和48年から長崎大学医学部生理学第一講座に勤務され、昭和56年10月から平成20年3月までは教授として医学部の発展にご尽力されました。また、長崎大学医学部の歴史に大変精通されており、原爆復興50周年の際に出版された『長崎医科大学原爆記録集全三巻』の制作に携われています。



**過去の講話記録**  
(平成28年度から平成元年度まで)



# 平成28年度講話

長崎大学核兵器廃絶研究センター  
センター長 鈴木 達治郎

私は長崎に2014年4月に参りました。まだ2年少ししかたっておりません私に、このような貴重な機会を与えていただき、誠に光栄に存じます。改めて71年前の今年今この時に一発の原爆で尊い命を一瞬のうちに奪われた犠牲者の方々の御霊に心から哀悼の意を表しますとともに、参列されている被爆者・ご遺族の方々とともに、「核兵器廃絶」への思いを、強く心に留めながら、お話しをさせていただきたいと思えます。

本日は大きく、①「第3の核の時代」に入ったこと②オバマ大統領広島訪問の意義と課題③今後我々として何ができるか、の3つの点をお話ししたいと思います。

まず、最初に「第3の核の時代」についてです。先日、ドイツ、ベルリンで行われた国際会議にて聞いた言葉なのですが、いま世界は「第3の核の時代」に入っているといわれています。第1の時代は、いわゆる米・ソの冷戦、核軍備拡大、の時代です。第2の時代は、冷戦後、核軍縮の希望が高まったと同時に、新たな核保有国（インド、パキスタン、北朝鮮）が登場し、新たな核の脅威が台頭した時代です。そして第3の時代は、第2の時代に台頭した新たな核の脅威が継続したうえで、さらに「冷戦思考の復活」と「非人道性アプローチ」がともに混在するという時代になった、ということです。言い換えれば、核をめぐる国際情勢は混とんとした時代に入り、その中で核兵器廃絶に向けて「促進する力（勢力）」と「阻害する力（勢力）」が対立する時代になったといってもよいでしょう。昨年の核不拡散条約（NPT）再検討会議では、まさにその結果、最終文書の採択ができないまま終わりました。このNPT再検討会議の意義と課題については、RECNAで報告書をまとめましたのでぜひご一読ください。

この中で、注目すべきは、対立が「核保有国」と「非核保有国」の対立ではなく、「核保有国+『核の傘』依存国」と「核の傘に依存しない国非核保有国」の対立が浮き彫りにされた、ということです。

日本は核兵器廃絶を究極の目標としながら、「核の傘」依存国として、核兵器禁止にむけての法的枠組みの議論に反対するという、極めて残念な立場をとっており、今後はこの「核の傘」依存国の役割が極めて重要であると思えます。RECNAでもこの点に絞った研究を昨年より開始いたしました。

次にオバマ大統領訪問の意義と課題です。

オバマ米大統領が被爆地広島を訪問した2016年5月27日（金）は、広島・長崎の被爆者、そして世界の核兵器廃絶を願う人たちにとって、歴史に残る大切な一日となりました。特に被爆者を抱擁する映像は感動的でもありました。一方でその成果に疑問を投げかける見方もあります。果たして、今回のオバマ大統領広島訪問の真の意義はどこにあるのでしょうか。また、今後の課題として何に注目すればよいのでしょうか。何よりも、現職の米大統領が被爆地を訪れ、直接「被爆の実相」を実感する機会を持ったこと自体、大きな意義があると思えます。きこ雲の下で何が起きたのか、その悲惨さを自らが感じる事ができれば、「核兵器は決して二度と使ってはいけない」との確信につながるでしょう。そして、その確信は「核抑止」という考え方の見直し、ひいては「核兵器についての価値観の転換」につながるのについてです。当初の予想を超えた17分にも上る演説は、オバマ大統領らしく、スケールの大きな、そして抒情的で聴衆の心に訴えるものでした。特に冒頭で日本人だけではなく、韓国人、アメリカ人も同

様に被爆者であることを述べたことで、この演説は、核兵器のもたらす悲惨な結末を人類共通の課題としてとらえる、という視点で書かれたことを示唆しています。その視点を踏まえると、次の3点が特に重要と思われます。第1に「科学技術の二面性」に言及した点です。科学技術の進歩に伴い、人間社会も同等の進歩がなければ、人類に破滅をもたらす可能性があり、科学的革命は「道義的革新も必要とする」と訴えました。このメッセージは原爆のもたらす被害を、「科学の進歩と人類」という、より普遍的なテーマに結び付けた、ということが出来ます。第2に、核兵器に対する考え方を要するよう訴えた点です。演説の中では「特に核兵器を保有する国は、勇気をもって恐怖の論理から逃れ、核兵器のない世界を追求しなくてはなりません」と述べています。これは「核抑止」という核戦略の基本に対する挑戦、という見方も出来ます。第3に、「戦争の根絶」を強く訴えた点です。戦争を根絶させること、紛争には軍事力でなく外交で解決すべきであること、を強調した点は平和憲法を持つ日本にとっても意義のあるメッセージであったと思います。

演説の最後に、広島・長崎に言及し、「核戦争の夜明けではなく、私だちの道義的な目覚めの地として知られるでしょう」と述べたことは、今回の訪問が未来に向けての出発点であることを強調したものとしてとらえることが出来るでしょう。この「ヒロシマ・ナガサキから核兵器廃絶に向けての道義的責任を人類として考えよう」、という呼びかけは、多くの人々が共感するメッセージだったと思います。

しかし、一方で、核兵器廃絶、核軍縮に向けての「具体的政策提言」が欠けていたことも事実です。大統領任期の締めくくりとして、期待された「核廃絶への新たな一歩」という提言がなされなかったことは、今回の演説の最大の問題点であった、ということが出来るでしょう。核兵器と戦争の根絶を目指すパグウォッシュ会議も「具体的な行動が伴わなければ、今回の訪問は象徴的な出来事で終わってしまう」と懸念を表しています。

また、米国が現在も「核兵器近代化計画」に約

100兆円という大規模な投資を続けていることや、広島にも「核のボタン」を持ち込んだことなども、被爆者の方々にとっては極めて遺憾な出来事だったと思われま

す。このように、今回のオバマ訪問は歴史的な一歩として記憶される反面、具体的な政策に踏み込まなかったため、「よく来てくれた」、でも「物足りない」というのが被爆者や地元の方々の正直な感想ということが出来るでしょう。こういった、オバマ大統領訪問の意義と課題についても、RECNAは報告書をまとめています。

最後に、今後この訪問を、どのように核兵器廃絶への動きへとつなげていくか、その中で日米両国の責任がいかに重いかを考えてみたいと思います。

安倍首相は、今回の訪問を、主に日米関係の強化という視点で、「日本と米国が力を合わせて、世界の人々に希望を生み出すともしびとなる」と訴えました。ところが、同じ時期、ジュネーブで開催されていた、核兵器禁止のための法的措置を議論する国連公開作業部会で、日本政府は「核軍縮を進めるにあたっては、北東アジアの厳しい安全保障環境を常に考慮に入れていかなければならない」との演説を行い、法的措置には消極的な意見を主張していました。米国を、はじめ、核保有国はこの会議に出席もしておらず、日本はむしろ、核保有国の代弁者、とまで見られてしまっていました。唯一の被爆国として極めて残念です。

そして、つい先日（7月10日）、米ワシントンポスト紙が、オバマ政権が核兵器の「先制不使用（第一不使用）」を含む核政策の見直しを検討していると報じました。これに対し、さっそく日本政府が協議を申し込んで、この先制不使用導入に反対しているとの報道がありました。「先制不使用」政策の採用は、核兵器の役割低減を進めるうえで、重要な意味を持つものであり、2010年のNPT再検討会議最終文書でも合意されています。もし米国が導入することになれば、「核兵器廃絶に向けての貴重な第一歩」として歓迎すべきだと思います。「核先制不使用が核の傘の弱体化につながる」との懸念は、仮に「抑止力」を維持すべきとの考

えに立ったとしても、根拠があるとは思えません。米国の圧倒的な通常戦力で十分に抑止力を維持できる、と考えられるからです。「核兵器の役割低減」は、岸田外務大臣が長崎で演説された、「3つの低減（核弾頭の低減、役割の低減、動機の低減）」にも含まれており、日本政府は反対する理由はないはずです。ただ、「核先制不使用」は「核による第二（報復）攻撃を容認すること」につながるため、あくまでも「核兵器の非合法化」に向けての第一歩と位置付けるべきです。似たような提言に「警戒態勢の解除」もあります。核兵器の役割を低減し、核攻撃のリスクを減らす、これらの政策を日本としても米国に要求していくべきだと思います。これらを含め、RECNAでは「先制（第一）不使用」についての見解をまとめました。

一方、核兵器の役割を低減しても、それがミサイル防衛などの通常兵器の軍拡につながるようでは、意味がありません。そのためには「核抑止力」に依存しない新たな安全保障の枠組みを構築すべく、日米がすぐにでも取り組むことが求められます。RECNAが提唱した「北東アジア非核兵器地帯設立に向けた包括的アプローチ」もその一つです。RECNAとしては、この提言のフォローアップとして、今年11月に「北東アジアにおける平和と安全保障に関する専門家パネル」の第1回会合を開催し、被爆地長崎を起点とした非政府機関による信頼醸成プロセス（「トラック2」と呼ばれています）を推進して参ります。

日米両国は、世界で唯一、「核兵器を使った国」と「被爆した国」という極めて特異な国です。言い換えれば、「核兵器のない世界」を目指して世界を主導していく「道義的責任」が求められていることを忘れてはいけません。それこそが被爆者の切なる願いでもあります。歴史的なオバマ大統領広島訪問を、単なる象徴的な出来事で終わらせないことが今日本にも求められていると思います。

私たちRECNAは「核兵器廃絶」を名乗る研究センターとして、その名に恥じないよう、被爆者や市民の皆様と心をつにし、被爆71周年のこの日に決意をあらたにして、今後も努力してまいります。

以上、ご清聴ありがとうございました。

### 鈴木達治郎様のご紹介

鈴木様は、被爆地長崎を拠点とする研究センターとして 2012年4月に発足した核兵器廃絶研究センター（RECNA）において、2014年4月に副センター長、2015年4月からは2代目センター長にご就任され、核兵器のない世界の実現を目指しての活動にご尽力なさっております。

# 平成29年度講話

長崎大学原爆後障害医療研究所  
所長 宮崎 泰司

先ほど皆様より献花がなされましたが、改めて72年前のこの日この場所にて被爆され、原子爆弾のために亡くなられた長崎医科大学の関係者の方々、長崎、広島で原子爆弾にて尊い命を奪われた犠牲者の御霊に心より哀悼の意を表したいと思えます。また、ご参列のご遺族、被爆者の皆様と共に、長崎が最後の被爆地となるよう、核兵器が廃絶されることを願うものであります。本日は、原爆犠牲者慰霊祭にあたり、貴重なお話しのお機会を頂戴いたしました。私が所属しております研究所の成り立ちやその活動などについてお話ししたいと思います。

長崎大学原爆後障害医療研究所は、文字通り、「原爆被爆者の後障害の治療並びに発症予防、及び放射線の人体への影響に関する総合的基礎研究」を目的として設立されました。1962年、原爆から17年後のことです。名称にあります後障害というのは、原爆による慢性の障害という意味で、例えば被爆から数年を経て被爆者に増加した白血病などがその一つです。当時は長崎大学医学部に附属する研究施設として創られ、6つの研究部門がありました。放射線の線量測定、放射線による障害発症機序の研究や、放射線による白血病やがんの発症の研究並びに治療の研究などを担当する部門です。これらは現在まで一部教室の名称や研究分野を変更しつつ続いています。そして2013年に、それまでの附属施設から、長崎大学の附置研究所として改組され、現在に至っています。研究所は4部門11分野の教室と共同研究推進センターからなり、31名の教官と多くの研究者が働いています。研究所は当初、設立の目的にもあるように原爆被爆者の後障害、放射線の人体影響を中心に研究などの活動を行ってきましたが、こうした研究が進む中、1986年に当時のソビエト連

邦チェルノブイリ原子力発電所にて史上最大の原子力発電所事故が発生しました。これに対して、それまでの研究成果を活かしつつ、現地の支援活動が始まります。1991年に始まった笹川記念保健協力財団事業に、放射線影響研究所、広島大学グループと共に参加し、現地での医療支援活動、被ばく線量の評価、血液や甲状腺への影響調査、疫学調査などを推進しました。これらの活動では、原爆被爆者の研究を通じてこの研究所に培われ、蓄積された知識や経験が、世界の被ばく者のために役立てられたと言えるでしょう。

チェルノブイリの事故で明らかとなったことの1つは、事故に伴う被ばくと甲状腺がんの関係です。事故に伴って放出された大量の放射性物質、特に放射性ヨウ素が、主に乳製品などの食物を介して身体の中に取り込まれ、それが甲状腺に集まり、子供の甲状腺がんの原因となった、というものです。こうした被ばくの在り方を内部被ばくと呼びますが、放射性物質で汚染された地域からの食物、飲料水を適切に管理しなければ、内部被ばくを通じて大きな人体影響に繋がることははっきりと示されたこととなります。これには、原爆被爆者にみられる甲状腺がんの発生とは違った点もあり、大切な事が明らかにされたと言えるでしょう。また、チェルノブイリ周辺の方々には、事故直後に十分な情報が提供されず、加えて汚染地域からの強制移住が実施されるなど、精神的に大変厳しい状況があったと言われており、ストレスや精神的外傷であるトラウマが報告されています。さらに、移住に伴って地域や近隣の方との社会的な結びつきが失われ、それは不安定な精神状態に影響したと考えられています。放射線被ばくの影響で将来、自分や自分の子供の健康が損なわれるのではないか、という強い心配も

あって、極めて複雑な感情が存在していることが指摘されています。これらも現地での活動を通じて明らかとなったことで、放射線被ばくが身体そのものに対して直接的な影響を与えるのみならず、精神的影響や社会的影響など幅広い影響を及ぼしうることが分かります。

そして2011年の東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所の事故です。これもレベル7という最大級の原子力発電所事故でした。そこで起こったことについては多数の報道がなされていますが、原研研究所は発災直後から長崎大学の一員として現地に赴き、多方面にわたる活動を始めました。それは、今も続いています。本研究所から、福島県立医大の職員となって現地で活動にあたった者もおります。福島県全体として放射線被ばく事故にどのように対応すれば良いのか、事故直後の急性期、そして復興が始まって進められている現在、放射線のリスクコミュニケーションや健康管理の面で原研研究所は多くの役割を担ってきたと思います。この事故では、事故直後の避難、汚染された食物や飲料水の管理、など多くの場面で間違いなくチェルノブイリ事故での様々な経験と研究成果が活かされました。幸いなことに、福島では全体として甲状腺の被ばく線量はチェルノブイリより低かったとされています。また、現地の住民の方には事故後から様々な情報が提供され、リスクコミュニケーションとして、汚染について、放射線被ばくやその影響についての情報共有が進められました。しかし、一方で汚染地域からの避難に伴った様々な問題が生じており、その対応が今も続いているのは皆さんご存じの通りです。住民の皆さんへの放射線の影響に関する情報提供や、放射線被ばくのリスクについての考え方にもまだまだ多くの問題が指摘されています。

現在では、原研研究所を中心に長崎大学は福島県の川内村や富岡町など、避難区域指定が解除された地域に拠点を置き、研究所の職員が現地で住民の方とふれあい、住民の皆さんが元の場所に帰れるよう、問題が少しでも解決されるようにと帰

還の支援を行っています。川内村では今年の5月までに80%程度の方が村に戻られたと伺っていますが、私たちの活動がこうした復興の役に立って欲しいと願っています。復興にはこれからも長い時間がかかるでしょうが、福島の方々に寄り添いつつ、支援を続けて行きたいと思います。

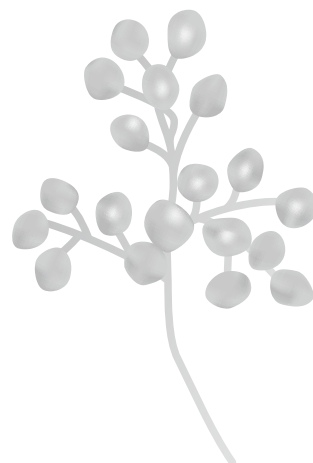
福島の事故において経験されたことの1つはこの分野の人材不足でした。緊急の放射線事故では、どのような対応が必要なのか、そういったことを十分に理解した、第一線の現場で活動する方々が十分育成されていなかったのです。私たちはこの反省に立って福島県立医科大学と共同で大学院を立ちあげ、災害・被ばく医療分野の人材育成を開始しました。そしてこの大学院にはアジアを中心として留学生も多く参加しています。アジア諸国もこうした人材育成の必要性に気付いたのだと思います。このプログラムでは福島と長崎の両方で教育することで、学生達に実際の被ばく医療、災害対応を学んで貰っています。

チェルノブイリ原発事故、東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所の事故はいずれも大変不幸な出来事でしたが、その対処において、私たちが原爆被爆から学んだこと、これまでの研究成果が少しでも役立ったとすれば、それはこの研究所の大きな使命の1つを果たしているのだらうと思います。この研究所は原爆被爆者の後障害に関する治療や発症予防の研究から始まりました。そこから、今お話ししたように、放射線被ばく事故への対応、国際協力、そしてこの分野の人材を育成する教育と、研究所の活動は幅を広げつつ活発に続けられています。放射線の負の影響を最小のものとし、被ばく者を支えつつ、放射線の安全な利用を進めること、それはこれまでも、これからも本研究所の進むべき道であろうと思います。72年前この地において原爆の犠牲となられた方々に対して、研究所は何ができるのか、自らにそう問いかけつつ、これからも努力して参りたいと思います。

ご清聴いただき、有り難うございました。

## 宮崎泰司様のご紹介

宮崎教授は、2013年4月に原爆後障害医療研究所副所長、2017年4月からは2代目所長にご就任されました。この研究所は、原爆被爆者の後障害の治療並びに発症予防及び放射線の人体への影響に関する総合的基礎研究施設として1962年に創設され、2013年4月に研究所に改組されました。血液学を中心に被ばく者医療、放射線の人体影響を研究し、さらには福島県など放射線被ばく地域の復興支援にもご尽力なさっています。





# 平成30年度講話

長崎大学原爆後障害医療研究所  
所長 宮崎 泰司

まず、皆様と共に73年前に、原子爆弾のために亡くなられた長崎大学医学部の関係者の方々を始め、多くの犠牲者の御霊に心より哀悼の意を表したいと思います。また、長崎が最後の被爆地となるよう、核兵器の廃絶を願いたいと思います。本日は、原爆犠牲者慰霊祭にあたり、昨年を引き続いて講話の機会を頂戴いたしました。これまで多くの諸先輩がこの場でお話しをなさいましたが、直接、当時をご経験になった方々、あるいはそのご遺族のお話は、重く心に響くものであります。

私が所属しております長崎大学原爆後障害医療研究所 血液内科学研究分野は大学病院においては白血病など血液の病気を専門に診断、治療を行っています。この教室の先々代教授が市丸道人先生でした。市丸先生は私が医師となって血液学の指導を受けた先生ですが、原爆投下当時、長崎医科大学の一年生でした。1945年の8月9日、色々な偶然が重なって原爆による死亡を免れていらっしゃいます。原爆投下の翌日に壊滅的被害を受けた長崎医科大学に救助に向かい、ご友人などを下宿に連れ帰ったもののほとんどの方が数日のうちに亡くなっていった、というお話しをしておられます。原爆放射線によって被爆者に白血病が増加したということもあり、市丸先生は原爆放射線の人体影響、特に白血病のご研究に進まれたのではないかと思います。その市丸先生は、二月ほど前、今年の6月14日に93才でご逝去なさいました。

福井順（すなお）先生も原爆当時は長崎医科大学の学生で、大学病院の南講義棟で被爆なさいました。そこは病院敷地内では爆心地とは反対側に当たるところで、コンクリートの基礎部分があり、その中に逃げ入って被爆されたそうです。爆弾の熱線や爆風からは何とか身を守られたものの、しばらくして出血や感染症など、原爆放射線による

と思われる重篤な急性症状を経験されていますが、どうにか乗り切り、その後医師として幅広い活動をなさいました。当時、同じ講堂にいた同級生の方でも、一瞬の避難行動を取ることができなかった方々は全員亡くなられたそうです。その当時、同級生であった129名のうち生き残った方は4名であったとお話になっています。福井先生は平成20年9月に81才でお亡くなりになっています。

永井 隆先生の弟子でもあった放射線科医の濱里欣一郎（はまさと きんいちろう）先生は、原爆投下時には長崎医科大学を卒業されたばかりで、山形の軍医学校におられたそうです。原爆投下後に長崎に戻られて、同級生と当時の長崎で救護活動をなさっています。また、長崎医科大学で亡くなられた方々の遺骨を埋葬するため、ご友人とともに遺体をぐびろが丘に安置され、友ここに眠るという文字を記して、慰霊塔をつくったとお話になっています。

当時を経験なさった方々は、凄まじい爆風による建物の破壊や猛烈な火災で変わり果てた街の様子、強烈な熱線で黒焦げとなった遺体や皮膚が剥がれ落ちるような重篤な熱傷（やけど）など被爆で負傷された方々についても同じように語られました。急性の放射線障害による出血や感染症で亡くなって行かれた被爆者についても繰り返しお話しになっています。原爆後の長崎の写真を見たり、被爆の体験について書籍としてまとめられているものを読むと、まさしく「想像を絶する状況」という言葉が出てきます。さらにこうした諸先輩のお話しは、自らの原爆やその惨禍の体験に基づいており、耳にするものたちの心にとっても強い印象を与えます。私が血液学の手ほどきを受けた故市丸名誉教授の体験も、医局員としても何度か伺ったことがあります。その一言、一言が、原爆が

破壊し尽くしたものが何だったのか、私の心に考えを迫るものがありました。しかし、原爆投下から時間が経過し、原爆を経験した先達が高齢となり、被爆者が減少していくという現実の中で、長崎大学に働き、特に原爆後障害医療研究所で活動するものとして何ができるのか、こうしたことを考える必要があります。

長崎大学には原爆や放射線と関連するセンター、研究所が二つあります。その一つは「核兵器廃絶研究センター」です。長崎大学は、被ばく医科大学の歴史を継承する世界唯一の大学として2012年に核兵器廃絶研究センターを設置し、「核なき世界の実現」を大学にとって重要な課題と位置づけて研究活動を展開しています。長崎大学が原爆被爆を忘れることなく、被ばくを実体験したアカデミアとして、そして地域に開かれたシンクタンクとしてこのセンターが運営されていることは、被爆体験を将来につなぐためにも重要でしょう。さらに、このセンターからはJournal for Peace and Nuclear Disarmament（平和と核軍縮）というタイトルの学術雑誌が刊行されています。世界の平和と核軍縮に寄与できる政策や考え方などについての科学的議論の場を世界に提供し、この分野のさらなる発展を目指すものです。長崎大学を中心に世界的な議論を展開するために重要な役割を果たす学術雑誌になると思います。

長崎大学のもう一つの放射線に関連する部局が、原爆後障害医療研究所です。この研究所は「原爆被爆者の後障害の治療並びに発症予防、及び放射線の人体への影響に関する総合的基礎研究」を目的として1962年に設立され、2013年に、それまでの附属施設から長崎大学の附置研究所として改組されました。現在、研究所は4部門11分野の教室と共同研究推進センターからなり、31名の教官と多くの研究員が働いています。研究所は、今、申しあげましたように、まさしく原爆被爆者の後障害に対処するための総合的基礎研究のために設立されています。放射線の影響を分子、細胞、モデル動物、人体への影響という、さまざまな医学・生物学レベルで研究するのみではなく、放射線によって生じた災害、すなわち放射線による人々の

生活や社会への影響にどう対処すれば良いのかについても研究し、その成果を福島などの現場で実践しています。研究によって科学的な成果を上げ、科学論文として発表することでその成果を世界と共有する。これが原爆は何をもたらしたのかを記録し、将来、いつでも利用可能とする道筋の一つです。このような活動は、大学というアカデミアで科学の一翼をになう者として、原爆被爆を始めとする放射線の影響から学び、放射線による被害を繰り返さないことに繋がる重要な務めであると考えています。

私たちが忘れてならないもう一つの役割は人材の育成です。研究所は、大学にあって医学部学生、修士課程や博士課程の大学院生など、次世代の人材育成にも力を尽くしています。彼らには幅広い学問を基盤として放射線影響や放射線リスク制御の分野で将来活躍して頂くことを期待しています。長崎大学で学ぶ者たちには、様々な学問と同時に長崎大学が持つ被爆の歴史を感じ、そこから一人一人が先人の苦勞を理解してほしいと願っています。

核兵器廃絶研究センターと原爆後障害医療研究所はそれぞれ活動の目的、内容は同じではありませんが、両者の根幹には長崎医科大学の原爆体験、原爆の記憶、犠牲となられた方々の想いがあります。昨年もお話ししましたが、放射線の負の影響を最小のものとし、放射線の安全な利用を進めることが、本研究所、長崎大学の進むべき道だと思いますし、これが73年前に原爆に倒れた犠牲者の御霊に、今もおられる被爆者の皆さんに報いることに繋がると考えています。

ご清聴いただき、有り難うございました。

## 宮崎泰司様のご紹介

宮崎教授は、2017年4月から原爆後障害医療研究所の2代目所長にご就任されました。この研究所は、原爆被爆者の後障害の治療並びに発症予防及び放射線の人体への影響に関する総合的基礎研究施設として1962年に創設され、2013年4月に研究所に改組されました。血液学を中心に被ばく者医療、放射線の人体影響を研究し、さらには福島県など放射線被ばく地域の復興支援にもご尽力なさっています。

# 令和元年度講話

公益財団法人長崎原子爆弾被爆者対策協議会

理事長 三根 眞理子

まず、皆様と共に74年前に、原子爆弾のために亡くなられた長崎医科大学の関係者の方々を始め、多くの犠牲者の御霊に心より哀悼の意を表したいと思います。本日は、原爆犠牲者慰霊祭にあたり、講話の機会を頂戴いたしました。これまで多くの諸先輩がこの場でお話しをなさいました。直接、当時をご経験になった方々、あるいはそのご遺族のお話は、生々しく心が痛むものでした。私が所属しております、原対協は被爆者の方々の健康を守るため、定期的な健康診断や、日常生活支援事業（一人暮らしの方たちの昼食会や運動）などを行っております。9万人近い受診者がおられた時代から、高齢化に伴い、現在は2万2千人と4分の1に減少し、寂しい思いをしております。私が本日、講話の機会をいただきましたのは、長年、原爆後障害医療研究所に勤務し、節目の記念事業に携わってきたからではないかと存じます。私が原爆の記念事業にかかわるようになりましたきっかけは、今から24年前の50周年（1995年）の折、相川忠臣名誉教授からお誘いを受けたことです。故調来助先生の調査資料を探しに調家へご一緒しました。そこで孫の調漸先生が「原爆被災復興日誌」を発見され、この慰霊祭で調亟治・朝子（しらべ じょうじ、ちょうこ）ご夫妻から長瀧重信医学部長へ譲渡されました。私はこのときから、ご遺族とお会いして、たくさんのお話を聞いてまいりました。その中から、いくつかご紹介し、また、節目の年に記念事業にかかわったことなどを紹介したいと存じます。

毎年、ご遺族の方々には慰霊祭に参列いただき、また遺族懇談会にも参加いただき、貴重な思い出をお聞きして心が痛みます。昭和30年（1955年）に出版された「追憶」は生き残りの職員、学生によって書かれたものです。故調来助先生はご遺族

の方たちが、わが子を想い、わが兄弟を偲んで書いた身近なものをまとめたいと、ご遺族の手記を集められて「原爆思い出の手記集 忘れな草」として編纂されました。昭和43年（1968年）に第1号を、昭和60年（1985年）に第7号を出版されました。被爆70周年の記念事業の一つとして、「忘れな草」の復刻版が出版されました。調来助先生の孫であられる調漸先生の発案でした。予算の関係で全国の図書館に配置する部数しか印刷できず、ご遺族の方々には残念な思いをされたことでしょう。ご希望の方にはコピーをお送りしましたところ、大変喜ばれました。受付に見本を展示しております。本日は、永安医学部長の特別なご配慮で1号と5号を10部準備しております。ロビーに置いてありますので、ご自由にお持ちください。

70周年の記念事業は、下川功医学部長・永山雄二原研所長のもとに実施されました。献花台の設置、グピロが丘への石段手すりの増設、被爆遺構の移設、永井隆博士の「原子爆弾救護報告書」の修復、「忘れな草」復刻版の作成、被災資料及び被災写真の展示が行われました。長崎医科大学、附属医学専門部、附属薬学専門部の学生、職員を亡くされたご両親やご兄弟、さまざまな思いが御ありでしょう。その思いは、ご両親から子供へ、子供から孫へとひきつがれ、毎年お参りされる姿には、いつも敬服しております。

本日は3つのことをお話ししたいと存じます。一つ目は、孫へとひきつがれた例です。

4年前の70周年の折、小学4年生の男の子が、東京から一人でやってきました。名前の刻んである碑を撮影してくるようにと、お父さんから命を受けてやってきたのです。探しても簡単にはわからず、事務の方が私を紹介してくれました。偶然の出会いでした。カフェテリアのそばにある、新し

い銘板を撮影し、任務が遂行できた満足な顔で帰っていかれました。記念講堂内にある元祖の銘板は後日、私が撮影してお送りしました。

二つ目は被爆直後の絵のことです。建物の被害は写真で記録されていますが、人間の被害については数少なく、特に医科大学の構内には写真家の方々が足をふみいれられておりません。被爆後の凄惨な光景は写真で見ることできません。米国が撮影した記録映画には建物の被害と後片付けをする光景、その一部に学生の焼け焦げた足がありました。お兄さんが附属医専の学生さんだったという方と朝長万左男先生の出会いがありました。朝長名誉教授の熱心な依頼に根負けされて、70周年の慰霊祭に絵をお持ちいただきました。美しい日本画をかかれる、西村寿子さんです。思い出したくない被爆直後の惨状を描いていただきました。講義室で講義を受講するそのままの姿で頭蓋骨だけが残っていた不思議な光景です。この絵は原爆医学資料展示室に展示しております。

三つ目は、ここ長崎医科大学で被災された先輩方の体験談です。今から14年前、被爆60周年記念事業は、兼松隆之医学部長のもと、被災資料及び被災写真の展示と記念講演会の開催でした。被災資料及び被災写真の展示はご遺族の方々に大変喜ばれました。講演は7人のOBにお願いしました。小林栄一先生、久松シソノさん、福井順先生、濱里欣一郎先生、川野正七先生、土山秀夫先生、市丸道人先生です。天国から、本日の慰霊祭を見守っておられることでしょうか。実際に原爆に遭われた先生方に当時のことを、医学生にお話しいただきました。その録画をインターネットで公開しております。先生方が講演された折に、公開の許可をいただきました。12年前の平成19年（2007年）に講話された濱里欣一郎先生のごことは、昨年、原研所長宮崎教授の講話でも触れられました。11月の慰霊祭を前にして、「構内に仲間の遺骨が散乱している。これをご家族がみられたら、どんなに悲しまれることだろう」と、生き残りの学生さんたちで遺骨を収集し、グビロが丘に埋葬して慰霊塔をたてられました。昭和55年（35回忌、1980年）までは、グビロが丘で慰霊祭が行われておりまし

た。ご遺族の高齢化に伴い、ここ記念講堂での慰霊祭となりました。

最近の出来事では昨年5月、薬学専門部の防空壕跡があっても意味がわからないということで、永安武医学部長のご配慮で説明版が設置されました。当時のことは、防空壕掘りの指導にあたられておられた清木美徳(せいき よしのり)教授が「追憶」に残されております。その一部を紹介します。「柏君と交代した田中君が壕を出たとたん、原爆が投下された。外で土運びをしていた学生は髪、眉毛は焼けて土にまみれ、足の皮は、はげ、足の裏側にくっついて、わらじをはいたように見え、23名が死亡した。」これを引用して防空壕の設計図とともに説明がなされています。

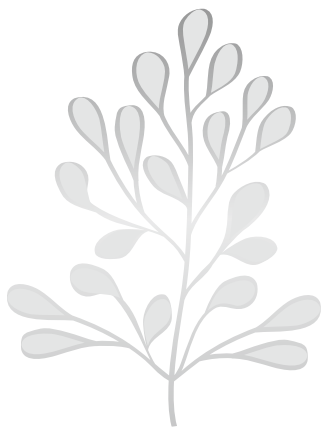
最後に遺族懇談会での出会いを紹介します。7年前（平成24年度、2012年）に講話をされた群家さんは、薬学専門部のお兄さんを亡くされました。5年前（平成26年度、2014年）に講話をされた椿山さんは、永井隆博士とともに救護活動をされました。毎年、遺族懇談会での関係の方々との出会いを楽しみにしております。

私が所属しております長崎原対協において、被爆者の健康と福祉のために今後も努力してまいりますことを、74年前の原爆で犠牲になられた方々の御霊に、お誓い申し上げます。

ご清聴いただき、有り難うございました。

### 三根眞理子様のご紹介

三根様は、長崎大学原爆後障害医療研究所において、原爆被爆者データベース構築と被爆者の健康に関する調査・研究に長年携われ、平成24年4月からは、長崎大学核兵器廃絶研究センター教授、現在は、長崎原子爆弾被爆者対策協議会理事長にご就任されております。



---

# 原爆復興75周年記念 事業について

---

---





# 原爆復興75周年記念事業について

原爆復興75周年を記念し、医学部長および原爆後障害医療研究所長を共同代表とした「原爆復興75周年記念事業実行委員会」を組織し以下の事業を行いました。なお、事業の詳細につきましては原爆復興75周年記念報告ホームページで公開していますのでご覧ください。

原爆復興75周年記念事業報告ホームページ

<https://www.med.nagasaki-u.ac.jp/med/hibaku75/> または「長崎大学 原爆復興75周年」で検索

## 原爆復興75周年記念講演会

原爆当時、大村海軍病院の院長であった泰山弘道氏のお孫様である瓜生田和孝氏に「長崎原爆の記録が全世界に伝わるまでの長い道のり」と題して講演していただきました。上記報告ページにて講演を収録したビデオをご覧ください。

## 「追憶」復刻版の出版

「追憶」は原爆被爆10周年事業の一つとして、昭和30年（1955）、教室ごとの死亡状況や個人の追憶などが刊行されました。ご遺族の強いご希望により、75周年を機に再び増刷することとしました。

## 「忘れな草」複製の作成

「忘れな草」は学生のご遺族の手記原稿を調来助先生がまとめられ、出版されたものです。ご遺族に好評でしたので複製を作成し、配布いたします。

## 「原爆被災資料目録」の出版

原爆復興75周年記念誌として、これまで原爆後障害医療研究所で保管されていた長崎医科大学および附属医院の原爆被災に関連する資料の目録を作成いたしました。今後、資料は本学附属図書館にて永年保管されます。

## 原爆復興75周年記念講演会



祖父・泰山弘道の略歴について  
長崎原爆投下後の状況調査  
日本で初めてペニシリンが使われたはなし  
執筆の動機～永井博士と「長崎の鐘」の出版  
瓜生田氏の「長崎の鐘」♪  
「長崎原爆の思い出」の執筆開始  
「週刊朝日」による遺稿の紹介  
「長崎原爆の記録」の出版  
英語版出版のはなし  
「完全版長崎原爆の記録」の出版  
広島のエノキのはなし  
クリフトン・トルーマン・ダニエル氏のはなし

<https://www.med.nagasaki-u.ac.jp/med/hibaku75/event/kouenkai.html>

### 「追憶」復刻版の作成

「追憶」は原爆被爆10周年事業の一つとして、昭和30年（1955年）に刊行されました。初版は500部の限定版で発行後すぐ品切れとなりました。

原爆被爆30周年（1975年）に同窓会の記念事業として再刊されました。再刊に当たり、次の5名の方が尽力されました。調来助名誉教授、箆島四郎名誉教授、内藤芳邦教授、中西啓先生、久松シノノ氏。

ご遺族の強いご希望により、75周年を機に復刻版を作成し、増刷することとしました。

「忘れな草」1号、調来助教授の執筆より引用

昭和30年(1955)10月、長崎大学医学部で出版されたもので、当時の長崎大学長古屋野先生の企画により、箆島教授の指揮の下に、各教室・学生・看護婦・其の他から資料が集められ、長い時日と弛まざる努力の下に編纂された、貴重な旧長崎医科大学の原爆記念誌である。



表紙には古屋野先生の麗筆になる「追憶」の二字の外に、「長崎医科大学原子爆弾犠牲者の霊に捧ぐ」の添え書きがあり、僅かに500部しか出版されなかったので各方面に分配された今日では、余分のものは1冊もなく、しかも絶版となっているので、容易に手に入れることもできない、まことに惜しい極みである。

この書は被爆記録を、医科大学、附属医専、附属薬専、事務関係の4部に大別し、医科大学の部では各教室を単位に、教授以下職員の死亡者名、死亡状況、故人の追憶などが記載され、学生関係のところには、遺族や友人の思い出の手記が集められているが、遺族の手記は極めて少なく、僅かに26人に過ぎない。

-----

## 「忘れな草」複製の作成

「忘れな草」の出版の経緯については「忘れな草」の最終号に調来助先生が執筆されています。以下に第7号よりの抜粋を示します。第1号を1,100部、第2号を800部、第3号を1,300部、第4号を1,000部印刷されましたが、調家に1部残るのみで、すべて絶版となりました。原爆復興70周年を機に、ご遺族の思いが詰まった「忘れな草」全7号の復刻版を作製いたしました。100部作製し、全国の図書館に配布しました。ご遺族の方には配布できず、70周年の遺族懇談会にてご希望の方には複製をお送りしました。大変喜ばれましたので75周年を機に100部複製を作成し、ご希望の方に配布することとしました。

以下、第7号より抜粋

銅板名碑建立の際に、遺族の方々から寄せられた寄付金に余剰を生じたので、私は遺族の皆様から原爆思い出の手記を書いて頂き、これを集めて小冊子を出版することとした。

私はその小冊子を「忘れな草」と命名したが、漢字で書けば「勿忘草」、英語ではforget-me-not、新版世界大百科事典を繙くと、この草は春から夏にかけて藍青の可愛らしい花をつけ、花言葉は「真の愛」とのことである。原爆の犠牲となった我が子、我が兄弟を忘れず、真の愛の心をもって永く冥福を祈るという意味で命名したと思う。

「忘れな草」は、私（調）が編集を担当し、私（調）の家（長崎市本原町1-29）にある「旧長崎医科大学犠牲学徒遺族会」から発行することとした。

「忘れな草」の本来の使命は、原爆に対する一般の認識を深めるために、愛児を亡くされた御両親の悲壮な思い出を書いて頂くことにあったが、併せて当時の長崎医大の学生達が、どんな状態で原爆の犠牲になったかを、政府当局の方々にも知って頂くように心がけ、それを遺族達に報告することとした。

以上の目的を果たすために、私は色々の資料を集め、一回だけ発行する予定であったが、各方面に多大の好評を博し、手記の寄稿が後を絶たなかったため、昭和43年から52年までの9年間に、6冊を発行するに至った。従ってこれが第7号に該当する。



# 編集後記

原爆復興75周年を記念して医学部、原爆後障害医療研究所、薬学部、医学同窓会、看護同窓会および長薬同窓会の合同で記念事業を実施しました。今回の事業のテーマは「継承」といたしました。被爆から75年の年月が経ち、原爆被災を実際に体験された方々が減りつつあるなか、医学部の学生たちに大学の被害と先輩たちが救護活動を献身的に行い医大再建のために奔走したことを伝えいつまでも忘れないでほしいと願いました。

本学医学部は世界で唯一の被爆医科大学として、これまで10年を節目として原爆復興記念事業を行ってきました。60周年には原爆直後を経験された医科大学の卒業生や看護師の体験を学生に向けて講演していただきました。いまや当時を知る卒業生も90歳を超えほとんどの方が逝去され、被爆体験をされた先輩方の生の声が聞けなくなる状況にあります。

今回の講演会では「継承」にふさわしい講師として、原爆当時に大村海軍病院で被災者の救護にあられた泰山弘道院長のお孫様である瓜生田和孝氏をお願いいたしました。御祖父様の「原爆の悲惨さを世界に知らせたい」という悲願を継承されていらっしゃいました。あいにくコロナ禍でオンライン講義となりましたが、その際の録画を医学部、原研のホームページで公開しております。これまで毎回行ってきました長崎医科大学関連の被災写真・資料展はコロナ禍で中止せざるを得ませんでした。

これまで貴重な被爆資料の多くは原爆後障害研究所で保管してきましたが、今後も永年にわたり確実に保管されることを願い、このたび、長崎大学附属図書館で保管していただくこととなりました。これを機に、これら資料の目録を制作し、広く知っていただく機会となるよう本誌の出版およびホームページでの公開を行うこととしました。この目録は当研究所資料収集保存・解析部の橋本富士子事務補佐員により作成されていた資料リストを元に三根、横田が再確認と編集を行い、本目録としてまとめました。

今後、これらの資料が永きに渡り原爆の悲惨な事実を語り続けてくれることを祈ると共に、学生達が世界で唯一の被爆医科大学としての歴史を継承してくれることを願ってやみません。

三根真理子、横田賢一、高野 元

(裏表紙写真)

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、出席者を制限して実施された医学部原子爆弾犠牲者慰霊祭の様子

## 長崎医科大学・附属医院 原爆被災資料目録

— 原爆復興75周年記念誌 —

2021年1月1日

編集・発行 原爆復興75周年記念事業実行委員会

〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4 TEL 095-819-7004

印刷 株式会社 インテックス

〒850-0046 長崎市幸町6-3 TEL 095-826-2200

